

1982年のサウジアラビア

著者	佐藤 寛
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
シリーズタイトル	アジア・中東動向年報
雑誌名	アジア・中東動向年報 1983年版
ページ	[619]-641
発行年	1983
出版者	アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00001928

サウジアラビア アラビア半島諸国

サウジアラビア王国

面積 214万9600km²
人口 932万人 (1981年央)
首都 リヤド
官語 アラビア語
宗教 イスラム教 (スンニ派ワッハーブ)
政体 君主制
元首 ファハド国王
通貨 サウジ・リヤル (SR) (1米ドル=3.435SR, 1982年12月29日)

クウェート国

面積 1万7680 km²
人口 156万2000人 (1982年6月)
首都 クウェート
官語 アラビア語
宗教 イスラム教 (スンニ派)
政体 立憲君主制
元首 ジャビル首長
通貨 クウェート・ディナール (KD) (1米ドル=0.290 KD, 1982年12月29日)

アラブ首長国連邦 (UAE)

面積 8万3600 km²
人口 79万7000人 (1980年央推定)
首都 アブダビ
官語 アラビア語
宗教 イスラム教 (スンニ派)
政体 首長制
元首 ザイド大統領
通貨 ディルハム (Dh) (1米ドル=3.671 Dh, 1982年12月29日)

バハレーン国

面積 674km²
人口 35万8857人 (1981年センサス)
首都 マナーマ
官語 アラビア語
宗教 イスラム教 (スンニ派, シーア派)
政体 首長制
元首 ハハレーン・ディナール (BD) (1米ドル=0.3759 BD, 1982年12月29日)

カタール国

面積 1万1400 km²
人口 22万6000人 (1981年自治省推定)
首都 ドーハ
官語 アラビア語
宗教 イスラム教 (スンニ派ワッハーブ)
政体 首長制
元首 カーリファ首長
通貨 カタール・リヤル (QR) (1米ドル=3.6399 QR, 1982年12月29日)

オマーン国

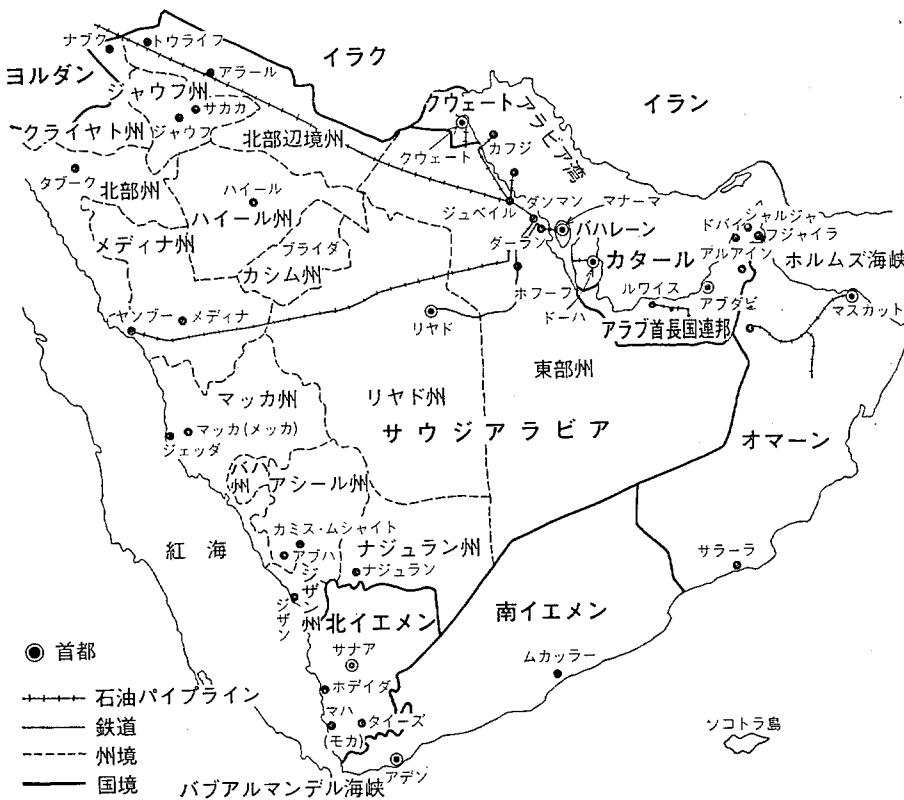
面積 30万 km² (推定)
人口 92万人 (1981年央)
首都 マスカット
官語 アラビア語
宗教 イスラム教
政体 君主制
元首 カブース首長 (スルタン)
通貨 リヤル・オマーニ (RO) (1米ドル=0.3454 RO, 1982年12月29日)

イエメンアラブ共和国 (北イエメン)

面積 19万5000km²
人口 855万人 (1981年センサス)
首都 サナア
官語 アラビア語
宗教 イスラム教
政体 共和制
元首 アリ・サレハ大統領
通貨 イエメン・リヤル (YR) (1米ドル=4.5625 YR, 1982年12月29日)

イエメン人民民主共和国 (南イエメン)

面積 28万7683 km²
人口 197万人 (1980年央)
首都 アデン
官語 アラビア語
宗教 イスラム教 (スンニ派)
政体 共和制
元首 アリ・ムハンマド最高人民会議議長
通貨 イエメン・ディナール (YD) (1米ドル=0.3453 YD, 1982年12月29日)



1982年のサウジアラビア

難局を迎えるファハド新体制

佐藤 寛

82年のサウジアラビアは外交、経済、石油、国内政治の四つの主要課題をめぐって各々一定の成果をみた後、下り坂に転じたという感が拭いがたい。既存の政策によって81年後半から82年中盤にかけて多くの政治的・経済的な成果が得られたことは評価されねばならないが、82年末の時点で四つの主要課題に関するすべての政策の行き詰まりが明らかになってきた。

外交政策では9月のアラブ首脳会談におけるフェズ憲章の採択という重要な成果をみた。これは81年8月に当時皇太子であったファハド現国王が発表した「中東和平に関する8項目提案」を基礎としたものであり、まがりなりにもアラブの統一を達成したという点でファハド外交の勝利と評価された。しかしこのフェズ憲章を土台としたアラブの中東和平工作は必ずしも順調に進んではおらず、期待されたほどの成果は挙げられていない。

一方11月の第3回GCC首脳会議（共同声明は656ページ参照）では、予想された湾岸集団治安協定の合意が得られず、域内関税撤廃も延期されるなどGCC統合化への動きは足踏みをみせている。

経済政策では昨年来の石油生産減少のあおりを受けて歳入が大幅に減り、82年第3四半期にはついに国際収支が赤字に転落するなど支出削減の必要性に迫られている。さらに82年末に至って開発へも影響が出はじめている。この予想外の経済の減速のために、積極的な経済開発を押し進めてきた従来の経済政策は根本的な見直しを迫られている。

石油政策では81年末のOPEC基準価格統一を境として、OPECの内部分裂が徐々に露呈されてきた。長期化するオイルグラット（供給過剰）による減産・値下げ圧力は強まっており、「逆オイルショック」の影響をサウジとても免れるわけにはいかない。

国内政治では、6月のハーリド国王死去の影響が秋以降じわじわと現われてきている。ファハド体制が必ずしも安定していないことは、いくつかの状況がそれを示唆している。83年に向けて国内指導層内部での意見調整がサウジの最重要課題となるであろう。

このように外交、経済、石油、内政のそれぞれについて、ファハド新体制がこれまでの政策の見直しをせまられていく過程が82年のサウジアラビアの動きであったといえよう。

外 交

●フェズ会議流会以後の動き 81年11月末のアラブ首脳会議流会をうけてイスラエルは翌12月、シリア領ゴラン高原を併合した。アラブ諸国はこれに対してイスラエルの予想通り、何ら有効的な対策をとりえなかった。ただひとつシリアのアサド大統領が訪サしたことが、アラブ再編への希望をつないだ。

82年に入ると、4月25日に予定されたシナイ半島返還が約束通り実行されるかどうか見守るという意味もあって、4月までのアラブの対イスラエル外交は控え目なものであり、PLOも極力イスラエル刺激を避けようとしていた。しかし一方でアラブ内部の統一はなかなか進まず、特にサウジとリビアの関係はどん底にまで落ちこんだ。3月にカダフィがサウジをイスラムの最大の敵と非難すると、サウジは最高ウラマー会議を開いてカダフィを「異教徒」と断定し、非難合戦はエスカレートした。また2月にシリアのハマで大規模な暴動が起るとシリアとサウジの関係悪化が伝えられた。

エジプトに対してサウジは、年初から「アラブ復帰の意志があるなら歓迎」という姿勢で、4月

25日に予定通りシナイ半島が返還されると「復帰はなされるべき」と一歩前進したものとなったが、サウジの側から具体的なアプローチはなかった。

●レバノン侵攻とハーリド国王の死 こうした中で6月6日、イスラエルのレバノン侵攻が開始された。これに対するアラブ諸国の足並みが揃わない中で、ハーリド国王はサウド外相をボンへ急派し、NATO 首脳会議に参集していたレーガン大統領はじめ欧米各国首脳に対し、イスラエルに圧力をかけよと要請した。こうした外交努力が注目を集めるさなかにハーリド国王は心臓発作にたおれた。

ハーリド国王の葬儀自体はイスラムの教えにそった質素なものであったが、弔問外交は活発をきわめ、ファハド新国王の外交によせる期待の大きさがうかがわれた。湾岸諸国の元首はもちろんアラブ穏健諸国元首、79年以降国交のとだえていたエジプトのムバラク大統領も訪れてファハドと75分間の会談をもち、エジプトのアラブ復帰へ大きなはずみになるものと期待された。

この間にもイスラエルの侵攻は進み、ベイルートを脅かすまでになった。ファハドはこれを黙認するアメリカの姿勢を強く非難した。このため6月25日にヘイグ国務長官が突然辞任し、後任に親アラブといわれるシュルツ氏が任命されると、これをファハドのレーガンに対する圧力とみるむきも多かった。6月末のアラブ外相会議には9カ国しか参加せずアラブの不統一を示したが、ここでサウジを含む6カ国外相委員会を結成し国連安保理5カ国と折衝すると同時に、レバノンの右派ファランジスト軍司令官バシル・ジェマイエルをタイプに招くなど本格的にレバノン危機收拾策に動き出した。

一方ファハド国王は6月末にフセイン・ヨルダン国王、7月はじめにアサド・シリア大統領を迎え、7月末にアブドゥラ皇太子をイラク、シリアに派遣するなどレバノン周辺国との交渉を進めた。

●フェズ会議再開へ 8月に入ると南北イエメンが急接近しアリ南イエメン議長、サレハ北イエメン大統領が揃ってサウジ、シリアを訪れアラブ



アラブ首脳会議

首脳会議をチュニスで再開することを呼びかけた。一方モロッコのハッサン国王はフェズでの首脳会議再開を提案、サウジはこちらを正式に支持しその実現に向けて根回しを開始した。

イスラエルはこの間さらにベイルートへの圧力を強め、西ベイルートを包囲された PLO は遂に撤退を余儀なくされた。8月末に PLO 兵士の撤退が始まると、アラブ強硬派・穏健派を問わず危機感が高まりアラブ首脳会議再開へのコンセンサスが形成され、8月28日のアラブ外相会議にはエジプト、リビアを除く20カ国が参加し、フェズでの首脳会議再開を決定した。

フェズ会議再開の直前、9月1日にレーガン米大統領はイスラエルによる占領地、入植地の扱いについて従来よりアラブ寄りの姿勢をみせる新中東和平提案を行なった。これは明らかにフェズ会議へ向けてのジェスチャーであり、米側の譲歩によってアラブ側へも譲歩すなわち8項目案の採択を促すものであった。またアメリカのアラブ寄り路線は先のヘイグ辞任と合わせて、ファハドの対レーガン圧力の証とされた。

さらに、前回のフェズ会議流会はサウジの根回し不足が原因といわれたが、今回はサウジに有利な条件が揃っていた。シリアとは元首、外相級の交渉が頻繁で十分な連絡がとれていた。イラクは今年に入って対イラン戦争の劣勢、9月に予定されていた非同盟会議主催断念などでアラブの主導権争いに加わる余力を失っており、サウジ支持を表明していた。さらにリビアは経済力の低下、OAU 首脳会議主催失敗、PLO 首脳部との対立で政治的影響力を失っており、無視できる状態にあった。

こうした情勢をふまえて9月6日にアラブ首脳会議は再開され、8項目案に若干の修正を加えたフェズ憲章が採択された。前年の会議流会の原因となった同案が、今回はアラブ統一案として採択された理由として(1)イスラエルのレバノン侵攻とPLOのベイルート撤退によるアラブ側の危機感の高まり、(2)昨年反対したシリア、イラクが支持しリビアが不参加、(3)ファハドの対米圧力への期待、の三つが挙げられよう。

●**ファハド外交の停滞** ファハド外交の大勝利とみえたこのフェズ憲章採択ではあったが、これをピークとしてファハド外交は下り坂に向かう。9月は巡礼月であったために巡礼に訪れたイスラム各国首脳と会談したもののパレスチナ問題についてファハドは特にはたらきかけを行なわなかった。

またこのレバノンはこのフェズ会議にいくつかの不満を残したと伝えられ、さらに9月15日に大統領に就任直前のバシル・ジェマイエルが暗殺されると、サウジは対レバノン交渉の足がかりを失う形となった。改めて選出されたアミン・ジェマイエル大統領が11月に訪サしたが、レバノン領内におけるイスラエル軍の存在をめぐって意見が調整できなかったもようで、サウジは対レバノン援助再開に難色を示した。

シリアとの関係も急速に冷え、それまで月に1～2度の割合で訪サしていたハダム外相が全く訪れなくなった。ヨルダンのフセイン国王は定期的に訪サしているものの、パレスチナとヨルダンの連合という「ヨルダン・オプション」がレーガン提案によって息を吹きかえし、独自に対米交渉を行なうなどレバノン・パレスチナ問題に関するサウジのイニシアチブは完全に失われた。

フェズ会議以降の数少ない外交努力として、アラブ7カ国委員会の一員としてサウド外相がソ連、中国を訪問し両国外相と会談したこと、および11月のファハドのアルジェリア訪問時のシャドリ大統領との会談があげられるが、ともに具体的な成果のあるものではなかった。ただしPLOのアラファト議長はベイルート撤退以後、しばしば訪サしファハドと緊密に連絡をとっており、今後のファハド外交の一つの足がかりになるかもしれ

ない。

しかし全体として対アラブ外交は行き詰まりを否定できず、フェズ憲章も宙に浮いた形となっている。ファハド外交は根本的な見直しの時期にきているようである。

●**イランとの関係** 81年12月のバハレーン革命未遂事件により、湾岸諸国はイランの革命輸出の現実性を再認識した。サウジはGCC諸国と治安協力協定を結ぶなど防衛体制の強化に努める一方、イランへの対処のしかたには、非難の姿勢を示しながらも全面対決を避けようという微妙な立場が貫かれていた。

5月から6月にかけてイラン軍が大攻勢を行ない、イラクが国境線まで撤退して停戦を呼びかけると、サウジははじめGCC諸国もイランに停戦を呼びかけた。しかしイランは有利な戦局を背景に停戦条件をエスカレートさせOIC(イスラム諸国会議)の調停には耳もかさなくなった。こうしたイランの態度硬化をうけてGCCはイラク支持を打ち出さざるを得なくなったが、イランを過度に刺激したくないという態度に変化はなかった。

9月の巡礼月になって昨年と同様にイラン人巡礼団がマッカ、メディナでデモを行ない、数次にわたってサウジの警官隊と衝突した。イランはこの事件を宣伝材料として国内で反サウジ報道を展開したが、これに対してサウジはイラン報道の否定以上のことは行わず、ここにも対決がエスカレートすることへの警戒が感じられる。

同様のことがOPEC内部でもみられた。82年後半にOPECが価格・生産量をめぐる内部調整に何度も失敗した大きな原因の一つにサウジとイランの対立がある。戦局の有利な展開と値下げ販売の実績を背景にイランはサウジに大幅減産を求め、サウジはこれに難色を示したのである。

この不安定なイランとの関係は、イラクとの戦争で何らかの重大な変化が起こらない限り83年以降も続き、引き続きファハド国王はじめサウジ指導層を悩ませるであろう。

経済・石油

●緊縮型の82/83年度予算 82年4月からの82/

83年度予算は歳入を前年比8.7%減の3134億サウジリヤル(SR)と想定し、歳入=歳出の均衡予算として発表された。サウジでは歳入の9割を石油収入が占めており、この予算では今年度の石油収入が前年比1割減程度になると見込まれていたことになる。この程度の減収であれば既存の支出計画の多少の修正、経常支出の節減によって適応が可能で開発には何ら支障がない、と考えられていた。したがってこの予算でも歳出の増加率は大幅にダウンした緊縮型ではあったものの、前年比5.2%増と既存の経済政策の延長上にとらえられるものであった。

この予算の特色は、(1)インフラ建設一巡によるインフラ部門の支出減、(2)国防・人材育成の重視、(3)福祉政策の維持、の3点にあり、特にインフラ部門の支出減は財政上の理由よりもサウジの開発が新たな段階に進んだためとして注目された。国防・治安支出は歳入減にもかかわらず続伸し総歳出の30%にせまろうとしている。福祉政策は国民へのオイルマネー還流であり、国民に不満感をおこさせないためにも削減するわけにはいかない。緊縮政策として目立ったものは一般行政部門支出が前年比50%以上の減少をみせているのみであり、経常支出節約とインフラ投資の縮小によって低収入状態を乗り切ろうとしていたことがわかる。

さらにこの予算が作成された4月時点では、(1)先進国経済の回復が82年第4四半期に始まる、(2)過剰在庫取崩しは同じく第3四半期に終わる、(3)冬季に向けての季節需要が第4四半期に現われる、(4)代替エネルギー促進が今回の価格低下で滞った、などの想定のもとに82年第4四半期には対OPEC石油需要が回復すると考えられていた。また当時のサウジの生産量は700万バレル/日程度であった。このため今年度の歳入は34ドル価格で700万バレル/日の生産を前提としたものであった。

●予想外の減産とその対応策 しかしその後も先進国経済に回復の兆しはみられず、在庫取崩しも長期的な原油価格の安値安定を見越して更に進み、第4四半期に入っても季節需要は現われず、サウジはさらに減産を迫られ、7~9月平均の産油量は600万バレル/日を割り込んだ。このため通

年の生産量も当初予定の700万バレル/日を大きく下回ることが確実で財政赤字は不可避と考えられるようになった。ここに至って政府は当初財政収入に組み入れられていなかった、対外資産からの利子収入、株式配当等を組み入れることを決め、この額は120億ドル程度と推測された。これによって100万バレル/日強の減産分は補えることになったが、政府は支出削減の対応策を真剣に考慮しはじめた。

補助金削減、公共料金値上げ等の経常支出以外で節約の対象になったのは、まずプロジェクト支出であった。第1にプロジェクト契約時の前渡し金を従来までの(全経費の)20%から、10%あるいは5%に削減したことがあげられる。これは今年度分の支出を来年以降に先送りするもので応急措置としての性格が強い。

また財政省下のPIF(公共投資基金)はペトロミン関連の一部プロジェクトに対し契約繰り延べ、フィージビリティ・スタディ見直し指令を行なった。さらに各省に対しては予定プロジェクトの優先順位付けを指令し、プロジェクトの先送りや中止の検討材料にしようとしている。PIFは各プロジェクト資金の60%を出資する機関でありこの認可がないと事実上プロジェクトは始動できないので、こうした措置は長期的にみて開発政策全体にも影響を及ぼすであろう。

ただし政府としては急激な開発のスローダウンは望んでおらず、進行中あるいは既契約のプロジェクトについては実行する構えである。とくに第3次5カ年計画の中核であるSABIC(サウジ基幹産業公社)の10大プロジェクトの遂行は至上命題となっている。このうちの一つペトロケミヤ(エチレン生産)からダウ社が撤退(12月)した時にもこのプロジェクトを放棄せず、同プロジェクト関連企業への資金優遇策をうち出してつなぎとめに必死であった。

●国際収支赤字転落の意味 82年末にかけて減産はさらに進み、利子収入等を取り入れても補いきれなくなり第3四半期、第4四半期には国際収支すら赤字となった。もちろんサウジは1600~1800億ドルにのぼる巨大な対外資産を有しており、これを一部取崩せば赤字は十分に補える。し

かしこの赤字が意味するものは、もはやこれまでのような開発政策を続けていくことは不可能であり、既存の支出方針の手直しでは対応できないということなのである。第3次5カ年計画で現在進行中のプロジェクトは完成されるとしても、それ以後85年からの第4次5カ年計画に向けて経済政策の練り直し、さらには近代化そのものの問い直しが必至であろう。開発を積極的に推進してきたファハド国王が、83年以降、サウジ経済をどのような方向に転換させるかが注目される。

○**石油政策** 原油の生産水準については数年来サウジ指導層内部で議論が戦わされてきた。国内近代化の積極的な推進と世界経済の安定のために、高水準の生産を行なうべきだという意見と、漸進的開発と国家資源温存のために低水準に生産を押しさえるべきとの意見で、前者はファハド国王、ヤマニ石油相ら、後者はアブドゥラ皇太子、ナーゼル企画相らに代表される。イラン・イラク戦争爆发以後1000万バレル/日という高水準の生産を行なったのは前者の意見によるものである。しかし今回のオイルグラットによって生産は低生産派の主張よりもさらに低いレベルにまで落ちてしまった。ファハド国王は石油政策をめぐる苦しい立場に立たされている。

一方 OPEC 内でのサウジの指導力の低下も著しく、生産調整を通じて石油市場に影響を与える「スイングプロデューサー」としての機能もとうに失われてしまった。82年前半にさまざまに評価された「開発のための必要生産量」は600~650万バレル/日であったが、82年末の時点ではこれを大きく割りこんでおり、これ以上の減産が果たして長期的に可能かどうか懸念されるし、83年末まで凍結とされた34ドルの基準価格への値下げ圧力も OPEC 内外で強まっており、圧力に抗してどこまでこの価格を維持できるかが注目される。

国内政治

●**ハーリド国王の死とファハド体制の成立** 6月13日にハーリド国王はかねてからの持病である心臓発作で死去した。このことはオイルグラットの長期化、レバノン情勢の深刻化、イラン、イラ

ク戦争におけるイランの大攻勢等、諸状況が激しく動いているさなかただただに中東諸国に大きな衝撃を与えた。しかし病弱であったハーリド国王時代から内政・外交上の実権はファハド皇太子が握っており、ハーリド国王が死去したその日の王族会議で、ファハドが全会一致で第5代国王に推挙され、内閣は全員留任し、新国王も「ハーリド路線の継承」を声明するに至ってサウジの支配体制に動揺はなく「内政・外交政策にも大きな変化はない」という認識が広く持たれたのであった。

しかし時がたつにつれてサウジ王室、指導者の間でハーリド国王を失ったことの大きさが改めて認識されつつある。ファハド新国王は、とくに内政の分野でハーリド国王の穴をうめられずにいる感が強い。ベドウィンの気質を色濃く残し、砂漠での生活とタカ狩りを好んだといわれるハーリド国王は国内各部族からの信頼も厚く、宗教界とも良好な関係を保っていた。このハーリド国王のもとに進歩派・先進の気質に富むファハド皇太子と保守派・漸進主義の雄とされるアブドゥラ国家警備隊長が並び立つ微妙な三角形のバランスの上に、ここ数年のサウジの諸政策は進められてきである。

今、この三角形がファハドを頂点とし、アブドゥラ、ファハドの実弟スルタン国防相を底辺とする三角形に変化すれば、自ら従来とは異ったバランスが生じるのである。ファハドがいかに「ハーリド路線の継承」と言ったとしても、それはそもそも不可能なことなのである。この新しい三角形は、明らかに進歩派に比重を置いたものになると予想された。ファハド新国王もこの点には気をつかい、そうした印象を国内に与えないように努めた。しかし若い頃からその政治手腕を故ファイサル国王に認められるとともに、プレイボーイとしても名のきこえたファハド国王に対する地方部族、宗教界の抵抗は予想外に大きいようである。

●**リヤド入りの遅れと空白の5週間** ファハドは即位直後にマッカで小巡礼を行なった後、8月末まで夏の首都タイフで過ごした。その後ジェッダに移り、9月のアラブ首脳会議、11月初めのモロッコ訪問もここから出かけここに戻った。11月9日からの GCC 首脳会議へもジェッダから出かけ、

首脳会議が終了した11日ようやく国王となって初めて首都リヤド入りを果たした。即位後なんと5カ月たったのことであった。ファハドがリヤドよりもジェッダを好んでいることは知られているが、国王でありながら首都リヤドを避けているのは、地方部族代表や王族内保守派との対立があるからではないかとの観測もある。

さらに11日から13日にかけてリヤド市民の大歓迎をうけたにもかかわらず、10日後の21日には突然アルジェリア訪問に出かけ、シャドリ大統領、PLO アラファト議長と会談をもった後にモロッコのフェズに引きこもった。この後ほとんど一切の外交活動をすることもなく12月26日に帰国するまで、5週間にわたって首都リヤドを留守にしたのである。この空白の5週間についてはさまざまな憶測があり真相はもちろん明らかではないが、この理由として宗教界との対立、地方部族の不满、王族に対する国民の不满、王族内部の対立などが考えられる。

宗教界との対立については、9月末にファハドが巡礼(ハッジ)のためにマッカ、メディナを訪れた際に、宗教界の最高権威バズ師らと会談を行なったといわれる。宗教界の不满は「イスラム道徳」の衰退であり、国内にいる多数の外国人、および外遊するサウジ人に対してもイスラムの規律を厳しく適用せよというものであった。ファハドはこのための対策を約したというが、近代化と最も鋭く対立するこうしたイスラム規範の厳格な適用と近代化とをどのように両立させるか、という古くからの課題が再びファハドを悩ませているのである。

地方部族の不满とは、故ハーリド国王が積極的に各地方を回り地方部族長との接触を保ったのに比べて、ファハドはジェッダにいただけでそうした努力を怠っているというもので、ファハドに対する不信感とその根底に感じられる。また石油収入減の影響をうけて地方へのバラまき財源がかつてほど大きくないことも地方部族の不满を増大させる要因となる。

王族に対する不满とは、王族の贅沢な暮らしぶりに対する民衆の反発が高まっていることで、こうした不満は王制そのものの批判とも結びつきやすい。79年のカーバ神殿事件でその存在を示した

各種のイスラム過激派の活動もシリア・イラン等の支援をうけて活発化していると伝えられるだけに、こうした国民の不满への対処が重要な課題となろう。8月に空軍のF15戦闘機を爆破した犯人はリビアで訓練を受けたといわれている。また『サンデーエクスプレス』紙が伝えた「リヤドでクーデター計画発覚、大量逮捕」という情報もうのみにしてはできないが、こうした脈落でとらえることができるであろう。

王族内部の対立とは、ファハドら進歩派とアブドゥラら漸進派との確執の噂であり、故ハーリド国王のような有力な調停者が存在しない現在、この問題の表面化はサウジ指導層にとって致命的なものになりかねない。

いずれにせよファハドは12月末に帰国し、内政は一応平穏を保っている。しかし83年に向けてファハド体制が内政に大きな課題を抱えていることは明らかであろう。

●噂される内閣改造 一方秋からしきりに内閣改造が噂されている。実際にあったのはジャゼイリ保健相がWHOに出向のために辞任し、アルゴザイビ工業電力相が代行を始めたことだけであった。しかし仮に83年以降内閣が改造されるとすれば、それはファハド体制の今後のみならずサウジ政策の今後を占う意味で重要なものとなる。

その布石として注目されるのは11月3日、空白の5週間の直前にアブドゥル・ラフマン王子が国防副大臣に任命されたことである。アブドゥル・ラフマン王子は建国者故アブドゥル・アジズ国王の40数人に及ぶ王子のうち、ファハド、スルタンらと母を同じくする「ステイリ7兄弟」のうちの1人である。この任命によってステイリ7兄弟は、国王ファハド、第2副首相兼国防大臣スルタン、国防副大臣にアブドゥル・ラフマン、治安を担当する内務大臣にナイフ、内務副大臣アフマド、そして首都リヤド知事にサルマン、と万全の配備をしいたことになる。この布陣がファハド体制の安泰を示すものか、逆に動揺を示すものか、現時点では明らかではないが「進歩派」ステイリ兄弟の勢力伸長はいやが上にも宗教界、王族内保守派との対立をひきおこすだけに、この点からも83年以降のファハド内政が注目されるところである。

1月

1日 ▶ファハド皇太子、UPM で演説。東側諸国と外交がなくても相互尊敬はあり得る、と声明。

2日 ▶ファハド、エジプトからの2島返還を要望。

3日 ▶サウド外相、イスラエルがアラブ被占領地を返還し、パレスチナ人民の権利を認めるなら、サウジはイスラエルを承認する用意がある、と語る〈NYT〉。

▶外務省、『ニューヨーク・タイムス』のサウド発言を「イスラエルが先にパレスチナ人民の正当な権利を認めることが必要」と修正。

▶ヤamani石油相、鈴木首相、桜内外相と会談。

5日 ▶ヤamani石油相、ファハド訪日中止伝達。

▶ファハド、北イエメンのサウル外相と会談。

7日 ▶ハーリド王、フセイン・ヨルダン王と会談（アブドゥラ、スルタンおよびヨルダン首相も同席）。

8日 ▶ファハド、東とも西とも秘密協定などはない、AWACS はイスラエルに脅威を与えるものではない、ソ連の侵略と戦うアフガン人民を支援する、と語る。

9日 ▶湾岸労働相会議（11日まで）。

10日 ▶ファハド、シリアのハダム外相と会談。

▶武器の輸入、取り扱いには政府に限る、と通達。

11日 ▶王室委員会、パレスチナ問題に対するサウジの立場を説明。サウジはパレスチナ人民に妥協をほめかす者、イスラエルの承認を強いる者について受け入れることはない、と声明。

12日 ▶ヤamani情報相、エジプトのアラブ復帰へ歓迎の意を表明、東欧圏と外交関係を樹立しても社会主義イデオロギー受け入れにはならない、と語る。

▶湾岸労働相会、各分野での自国、外国労働者分布の研究をすることを決定。イランのパハレーン事件への関与を非難して閉幕。

13日 ▶アフマド副内務相、パハレーン事件でイランを非難。自国も正常化できないものが、他国を正常化できるはずがない、イラン社会に広がっている病根に対してアラブ諸国は徹底的に対抗する、またモロッコとの治安協定は検討中、と語る。

15日 ▶クリビ・アラブ連盟事務局長、アンマンから到着、アラブサミットの機は熟した、と語る。

16日 ▶F15の第1団が到着。

18日 ▶イラクでアブドゥラ・サダムフセイン会談。

▶スルタン、兵器供給源の多様化の必要性を強調。F15、AWACS はサウジ人が操作する、と語る。

21日 ▶カブリ・サウジ IMF 顧問、IMF から独立し

たイスラム通貨基金の設立を検討中、と語る。

▶ビシャラ GCC 事務局長、国連安全保障理事会決定に拒否権の誤った使用は、安保理の存在意義を軽々しくする、と不満の意。

22日 ▶スルタン、核の軍事利用否定、平和利用を考慮、パキスタンとの協力には核は含まれていない、と語る。

▶GCC 代表のチームがオマーンに派遣され、軍事・経済面の支援について話し合う。

24日 ▶ヤamani情報相、8項目案について沈黙を守っているのは諸国に考える時間を与えるため、と語る。

▶ヤamani情報相、エジプトがアラブ復帰するなら、全アラブはムバラクに手をさしのべる、と語る。

▶マレーシア国王、訪サ。

25日 ▶第1回 GCC 国防相会開始。スルタン、軍備の統一化は武器供与の多様化という方針に反するので行わない、防相会に秘密協定は存在していない、南イエメンとの紛争問題をかかえているオマーンの招きによるオマーンへの使節団の報告を検討する、と語る。

26日 ▶第1回 GCC 国防相会終了。スルタン、ビシャラ記者会見、「決定は全て満場一致で何の留保もない。湾岸防衛の傘については、アッラーと預言者ムハマドの教え以上の傘はないが、湾岸各国の軍事力が分割されない力として存在し、アラブ・イスラム諸国のために行使され、アラブの大儀と侵犯された権利の回復に対して注意を払う事なしに、湾岸の治安は保てない」と語る。

▶GCC 財政相会議開幕。

▶カレン・ブルテンソ連共産党中央委員会国際関係局副局長、社会制度の相違はソ連とサウジの外交樹立に障害とはならない、と語る。

27日 ▶GCC 財相会、ガルフ投資（資本金30億 SR）公社設立に合意。次回は6月開催。それまでに統一経済合意最終案作成。

28日 ▶パキスタン・ハク大統領、サウジ-パキスタン関係は理想的である、と語る。

29日 ▶GCC 独自の RDF 構想を、ハマド・パハレーン国防相が表明。

31日 ▶スルタン国防相、エルス仏国防相と会談、海軍増強に伴うトレーニング施設計画に調印（相互関係について話し合い）。

▶GCC 石油相会（リヤドで、非公開）——共同石油戦略、石化プロジェクト、アラビア海への戦略パイプライン見直しなど話し合う。統一経済合意に基づく調整。

2月

1日 ▶ファハド、エルス仏国防相と会談。

▶フィリピン大使館、フィリピン人による殺人、婦女暴行事件に遺憾の意。サウジ側の処罰を支持。

▶サウジ開発基金、工業開発基金、不動産開発基金、信用銀行、農業銀行を近代銀行システムに改正準備。

3日 ▶スルタン国防相、アラブ・イスラエル戦争が始まったら、サウジはPLO側に立ち、PLOと米との仲介者とはならない、またイランは友朋国であり、友朋が敵としてふるまわない限り交友を続ける、と語る。

7日 ▶GCC 外務相会閉会。ビジャラ事務局長、GCCとバハレーンとの連帯を明言して、バハレーンが外部からの脅威にさらされればGCCは中立ではなく一致した態度をとる、と語る。

8日 ▶ファハド、ラマダン・イラク第1副首相と会談。

9日 ▶OIC ジャティ、イ・イ戦争調停団と接触再開(GCC 外務相会声明「OIC と協力」を実行に移すため)。

▶スルタン国防相・ワインバーガー会談——米サ軍事合同委設立に合意、米がイスラエルの抑圧政策(ゴラン)に対して反対する立場をとるよう希望する。

15日 ▶ヤamani情報相、米サ秘密軍事協定の噂を否定して、こうしたデマは共通の敵にあやつられたもの、米サ合同委の目的は、武器購入と軍事協力のみである、と語る。

▶ファハド、カーリファ・クウェート石油相と会談(ジャビル首長の親書持参)。

▶ファハド、ムハンマド・バハレーン内務相と会談(カーリファ首長の親書持参)。

16日 ▶ヤamani情報相、サウジ国内で南イエメン人が政府転覆の訓練との伝報道を強く否定。

▶サウジの補助金をうけた低価格食糧を外国へ密輸した容疑で19人の外国人の取り調べ開始。

19日 ▶閣議、公務員の就業時間外の民間企業での就労認可問題を検討(公務員の経験を民間に生かすため)。商業相から経理・技術者に関して商業登録を認めるよう要請。

20日 ▶ナイフ内務相、サウジ人のイラン旅行を禁止——何の利益も得られない、しかしイランとは友好関係を保ちたい、サウジは、イラン人がサウジに対して抱いているような感情は有していない、と語る。

▶国内には250万の外国人労働者がいる、との発表。

21日 ▶UAE・カタール治安協力協定締結(ナイフ内務相立ち合い)。

▶サウジ・カタール治安協力協定締結。バハレーンとの協定と同じもの。

▶サウジ・UAE 治安協力協定締結(ナイフ内務相・ハモウダ UAE 内務担当国務相)。ナイフ内相、クウェート、オマーンとも結んで完結させたい、と語る。

22日 ▶アラブ内務相会、ナイフ議事。各内務相20日からリヤド入り。内務相委員会の恒久設置を決議か。

▶アラブ内務相会開会(サウジ、北イエメン、クウェート、バハレーン、オマーン、カタール、シリア、チュニジア、ジブチ、レバノン・ワザン首相、モーリタニア副内務相)。①アラブ内務相評議会の位置づけ承認、②その結果をアラブ連盟に提出する、と決定。

▶ナイフ内務相、湾岸緊急展開部隊創設をサウジは時期尚早と考えている。理由は、バハレーンから公式の提案を受けていない。GCC では提起されていない、と語る。

23日 ▶オマーン・サウジ治安協力協定締結(ナイフ内務相、サイド・オマーン内務相)。

▶アブドゥラ、シャケル・イラク内務相と会談。

24日 ▶GCC 内務相会終了——GCC 治安協力協定締結に合意。協定草案作成を事務局に要請(10月の次回に提出)。バハレーン提出のイラン策謀についての問題審議で、バハレーンの全面支援を確認、一国にに対する内政干渉はGCC 全加盟国に対するものである、GCC 各国に対して敵意を持つものは、隣火として、また歴史的結びつき、宗教的同一性を考慮して、そうした意識を捨てることを希望する、と表明。

▶スルタン国防相、F15を米からサウジに運んだのはサウジ人パイロットであり、サウジ人パイロットの能力はきわめて高度、と語る。

26日 ▶アサド・シリア大統領、フェズ再開の可能性について、シリアはサウジとの関係が強く、国家的問題が起こった場合には友好関係を考慮して共通公約数を見出す努力を行ない、アラブとしての利益を強める、と語る。

27日 ▶民間航空局発表。27日3時にハイジャックされたタンザニア航空機(B737)が緊急着陸を要請した。王国の政策はハイジャックに反対するものであるが、機上に93人の乗客があり、燃料が少なくなっていたので、人道的配慮から、給油のためジェッダに着陸を許可した。給油後、同機はヨーロッパへ向けて出発した。ハイジャッカーはその後ロンドン郊外に着陸。ニエレレ・タンザニア大統領の退陣を要求。

▶スルタン国防相、クウェート参謀長(アブドゥラ・ファラジ・アルガネム少将)と会談。

28日 ▶ヤamani情報相、ハモウダ王がハマ事件で湾岸諸国にメッセージを送ったという報道(イスラエル放送)を否定して、サウジは他国の内政には干渉しないと語る。

3 月

2日 ▶ファタハ、駐サ代表ナトシャー、アラファトの3月の訪問は、イ・イ戦争の調停と再開フェズ会議の調整が目的、と語る。

▶スルタン国防相、湾岸幹部将校学校設立調査中、サウジの軍事学校は現時点ではサウジ人のみ、と語る。

▶ヤamani情報相、サウジは8項目案が既にアラブ提案となっているので修正のために何もできない、と語る。

▶マルコス大統領、1974年ミンダナオ南部の問題の時にイスラム諸国がフィリピン統一を呼びかけて以来イスラム諸国には敬意を払っている、サウジを第3世界のパイオニア、世界のリーダーとして考えている、と語る。

▶米国防省、サウジ向けF15戦闘機5機、F15偵察機10機売却発表（スベア・パーツ含み3億5000万ドル）。

3日 ▶ハマド将軍、ソビハ GCC 事務次官と会談。第2回 GCC 参謀長会議について話し合う。

4日 ▶イランのファントム機領空侵犯、着陸要求を許可。事情聴取。イラン大使館に報告。

6日 ▶王室令、3月の生産量750万 BD と発表——公示価格値下げの動きに警告、今までのサウジの主張が正しかったことが明らかとなった、現状をサウジの責任と非難するのは間違いである、OPEC 諸国共通の利益を守るために減産する。公示価格引下げは、売上げ増とはならず石油収入の低減を招くだけである、と声明。

7日 ▶リヤドで GCC 外相会議（～8日）。

8日 ▶閣議、ファハドのチュニジア首相、セネガル大統領、アラファト議長との会談について報告。対イエメン関係について話し合う。石油政策をも検討。

9日 ▶サウド外相、バハレーン・カタールに新たな国境紛争は起こっていない。GCC の手で合意が確立している、と語る。

▶リビアに対する GCC 諸国の対応は議題とならなかったが、それぞれの国が不満を表明している。

▶ドーハで第2回アラブエネルギー会議、ターヘル・ペトロミン総裁、石油情勢について、OPEC 諸国がもう少しの期間低レベルの生産を続行すれば危機は回避できる、現在の世界市場状況が改善されるまでは減産を続ける、現状で石油を武器とすることは無益、と語る。

12日 ▶韓国の徐商工相訪サ。スレイマン商業供給相、ヤamani石油相、ゴサイビ工業電力相、アバルハイル財政相らと会談（16日まで滞在予定）。

13日 ▶カウンチュ・ニジェール大統領サウジ着（公式訪問）。カダフィ発言に遺憾の意。ニジェールとリビアの緊張はさった、と語る（5月に OIC 会ニアメで）。

14日 ▶ハード英外務担当相、8項目案がアラブ案にな

ればイギリスは受け入れる、アラブの分裂は西側にとって遺憾である、エジプトを含めたアラブ連帯が必要、EC イニシアチブは安保理決議に基づいており、現状ではイニシアチブを生かす機会を待っている、パレスチナ人民の自決権をイスラエルが拒否し、アラブの何国かがイスラエルの生存権を認めないことに問題がある、と語る。

▶ファハド皇太子、各省庁購入担当者に、事務用品、備品等は国内産業育成のため国内で調達するよう通達。

16日 ▶GCC 参謀長会議、軍事調整、協力勧告を採択して閉会。湾岸兵器産業設立についても話し合う。バハレーン、オマーン軍事視察団報告。

▶税関、1980年11月～81年10月間の総輸入額1101億リヤル（324億ドル）、と発表。

18日 ▶最高ウラマー会議声明——「リビアによるサウジのイマーム攻撃、虚偽の放送について審議した。スンナ（慣行）を拒否し、ハッジや教えを愚弄するカダフィを非難する。カダフィを異教徒と判断」。

19日 ▶アバアルハイル財政相、経済のサウジ人化が重要、リヤルは SDR と連関している。今後の予算は工業、農業、投資、メンテナンス、管理部門への支出が増えるだろう、と語る。

20日 ▶ヤamani石油相、4月1日から50万 BD 減産で、700万 BD に、OPEC シーリングは1750万 BD。価格下落が続けばさらに減産する、と語る。

21日 ▶リヤドで GCC 税関担当者会議——域内特惠関税、域外統一関税について討議。

▶公安局、サウジの免許がない外国人の運転禁止通達。

22日 ▶シャティ・OIC 事務長、西側諸国のアフガンゲリラ援助に加わらないのは米ソ対立に巻き込まれないため、と語る。

▶商務省、詐欺行為防止新制度案を閣議に提出。不正商行為防止機関の権限拡大。

27日 ▶ファハド皇太子、クウェートサバハ皇太子に親書（駐サ大使に渡す）。

28日 ▶湾岸商工会議所会議——原産地証明書、通商手数料の値下げ問題、輸入保険契約問題について討議。貿易業者間紛争調停委員会も開設。

30日 ▶緊急アラブ外相会議開催——西岸問題について PLO の要請による。

▶第1回アラブ投資家会議開会——ビジネスマン、投資家、一部関係者500人が参加。

▶サウジ・シエラレオネ共同声明——イスラエル非難、サウジ案支持、ソ連のアフガン侵攻批判。

31日 ▶ハーリド王、イラクのフセイン大統領と電話会談。

4月

1日 ▶ヤamani石油相、ナイジェリアに値下げ圧力をかけている企業に対して警告。

3日 ▶スルタン国防相、イラクでフセイン大統領との会談を終え帰国。

▶ハーリド王、カタール、オマーン、UAE との治安協力協定承認。

4日 ▶スルタン国防相、イラクは平和を望んでおり、イランへの領土的野心はない。イラクから軍事援助の要請はなかった、と語る。

▶リヤドで人材育成委員会（スルタン国防相、ナイフ内相、サウド外相、シェイク高等教育相、ナーゼル企画相、クワイティ教育相他）。

5日 ▶サウジ政府、非同盟会議の9月バグダッド開催を延期する理由はない、と表明。

▶ハーリド王、ヨルダンのフセイン国王と会談。

▶第7回サウジ・北イエメン合同委員会にスルタン、サウド他代表団。

▶SAMA 1981年版年次報告書発表。

6日 ▶サナアでサウジ・北イエメン合同委員会開始。

▶スレイマン商業相、高活動のサウジ人化政策において非サウジ人のパートナーシップは否定しない、専門知識、ノウハウが必要なものについてはパートナーシップを歓迎する、と語る。

7日 ▶スルタン国防相、北イエメンサレハ大統領と会談、今後も援助継続、と語る。

▶ハーリド王、南イエメンの洪水被害に1800万SRの援助指令。

9日 ▶南イエメン・アリ議長からハーリド王に親書。

10日 ▶南イエメン・アフマド外務副大臣ジェッダ着。サウド外相にアリ議長からの親書渡す。

11日 ▶エルサレムのアルアクサモスクで銃撃戦。イスラエル兵がイスラム教徒に発砲。

▶アバアルハイル財政相、石油収入減は、予算・開発計画支出に何の影響も与えない、ジュベイル・ヤンブー両プロジェクトでキャンセルしたりしない、と語る。

12日 ▶ハーリド王、アルアクサ襲撃に抗議のためイスラム諸国に対して一斉ストライキを呼びかけ。

16日 ▶サルマンリヤド知事（パレスチナ戦士・被災者家族救済委員長）、パレスチナ人への援助を訴え。

18日 ▶ガンジーインド首相訪サ、ハーリド王と会談。ファハド、アブドゥラ、スルタン、サウド、アルゴサイビ工業相ら出席。インド側は蔵相、観光相、ラジブ・ガンジー。援助よりも貿易問題を話し合い。

▶OIC 調停委員会、イラン・イラク訪問交渉再開。

19日 ▶カイヤル郵政相、石油生産は500万BDまで落とすことが可能、と語る。

▶ターヘル・ペトロミン総裁、石油需給は8～9月に均衡するであろう。ペトロミンは減産の影響を受けていない。ヤンブーからの輸出が多少減っただけである、と語る。

▶国家警備隊3回目の実弾演習実施中。「アルデリーヤ」演習。空軍も共同演習として参加。アブドゥラ隊長近日中に視察。

▶ファハド・ガンジー会談。

21日 ▶リヤドでGCC 外相会合声明——「シオニストに対抗するためアラブは分裂をやめるべきである」（次回は5月19日に）。

22日 ▶アバアルハイル財相、新年度予算について言及。石油収入減にもかかわらず予算規模は拡大。

▶石油収入81年1012億 F_r （前年比19.8%増）。

23日 ▶82/83年予算承認。歳入7.8%減、歳出5.2%増、3134億SRの均衡予算。

24日 ▶リヤドでGCC石油相会合開催。

▶イラン、戦争賠償金500億 F_r 要求を非同盟調停団に提示。もしサダムフセインが更迭されないならイラク領に侵入してバグダッドを占拠する。第一段階としてイラクのイラン領内からの無条件撤退を要求する、と声明。

24日 ▶ナイフ内相、南部地域（ナジュラン他）視察（～29日）。

25日 ▶スルタン国防相、AWACSはGCC加盟国の要求に応じて用いる用意あり、と語る。

▶イブラヒム・イラク革命評議会副議長、ハーリド王に面会、フセイン大統領の親書渡す。

▶イスラエル、シナイ半島から撤退。

26日 ▶スルタン国防相、ダハラン陸軍基地建設起工式に参加。

27日 ▶ヤamani情報相、パキスタン公式訪問。

▶サウジ、国連にイスラエルの資格停止、経済・軍事制裁呼びかけ。

▶ハーリド王東部地域視察開始。アブドゥラ、スルタン同行。

28日 ▶サウジ政府、イランにおけるクーデター未遂事件にサウジが関与していたというイラン報道を否定。「シヤリアトマダリ師らと接触は根拠のない噂」と言明。

30日 ▶ラカーニ国連大使、イスラエル非難決議採択はアラブの勝利、と語る。採択結果は、賛成86、反対36。反対は西欧、南米。

▶アラファト、ハーリド王と会談。アブドゥラ国家警備隊長、スルタン国防相、サウド外相とも会談。

5 月

1日 ▶サウド外相、ナイジェリア・ヤヒナ石油相と会談。石油市場と OPEC への影響について。

▶ハーリド王、イサ首長（バハレーン）と会談。アブドゥラ国家警備隊長、スルタン国防相同席、バハレーンのムハマド・ムバラク外相、ムハンマド内相同席。

▶ハーリド王、東部視察を延長（先週から継続）、カティフに到着。

▶マスカットで GCC 運輸相会開会。

2日 ▶サウド外相、レオ・チンデマンス EC 議長（ベルギー）と中東問題について会談。

▶GCC 各国、ナイジェリア石油相に支持約束。値下げ圧力をかける会社には GCC が圧力をかける。

▶ハーリド王、エルシャド・バングラデシュ参謀長と会談。

3日 ▶サウジ・北イエメン調整評議会。北イエメンへの20億 SR の直接援助決定。

▶ハーリド王リヤドに着着。

4日 ▶湾岸石油公社総裁会開幕。価格、市場政策に関する勧告採択。

▶ハーリド王、ザイド大統領（UAE）と会談。ザイド大統領のイ・イ戦争調停イニシアチブ等にも言及。

▶ハーリド王、アフマド UAE 副首相とも会談。アブドゥラ国家警備隊長、スルタン国防相同席。

▶ナーゼル企画相、サウジの開発は予定通りに進められている。財政的な不安はない、と語る。第31回、アラブ・米貿易協会定期会議。

6日 ▶ハーリド王、アスバヒ・北イエメン教育相からサレハ大統領の親書を受け取る。

▶スナイヤン外務次官、フェズでのエルサレム委員会に出発。

8日 ▶マジド・マッカ知事、法定年齢以下の青少年の自動車運転禁止呼びかけ。

9日 ▶ヤamani石油相、現生産量550万 BD に減っているという説を否定。

10日 ▶ナイフ内相、エジプトのアラブ復期は実現されるべきで、そのためには分離させた原因の消滅が必要、またイ・イ戦争はアラブ・イスラムの敵に利益になるだけ、シオニストの攻撃下のパレスチナ人支援、と語る。

▶軍事制度改革王室令。要員増、評議会設立（議長：皇太子、副議長：国家警備隊長）。

▶サウジ、パキスタン外相会談。

11日 ▶ハーリド王、シリア参謀長（ヒクマト・シェハビ）と会談（アブドゥラ国家警備隊長、サウド外相、ハマド参謀長同席）。

▶ハーリド王、パキスタン外相、ソマリア外相と会談（アブドゥラ国家警備隊長、サウド外相、ハマド参謀長同席）。

14日 ▶ビシヤラ GCC 事務局長、全アラブはイラクを支持せねばならぬ。シリア・イラクの国境緊張問題についても検討する、と発言。

▶SAMA 報告、1981年の石油輸出収入（LNG 含む）1353億ドル（3758億 SR）。81年の国際収支余剰は1440億 SR。

15日 ▶GCC 緊急外相会、「より広範な当事者との接触、検討のため」会議を月末に延期。声明出さない初の外相会。

▶ビシヤラ GCC 事務局長、「湾岸はイラクへの財政支援をすべき」、「明らかな立場で戦争に対処すべき」と声明

18日 ▶イスラム調停委、ラマダン休戦を呼びかけ。四つの停戦条件を両国に提示。(1)イラクの西部、南西部占領地からの撤退。(2)国境紛争地帯の休戦監視軍をイスラム諸国で派遣。(3)シャトルアラブ水路のイスラム統治（交渉終了まで）。(4)戦争原因と賠償金を決めるイスラム調停委の設置。

▶アジズ・イラク副首相、ハーリド王にイラク招待のフセイン大統領の親書を渡す。

25日 ▶GCC 1周年記念式典、ファハド皇太子、ビシヤラ GCC 事務局長出席。

26日 ▶〈アルリヤド〉：ファハド皇太子インタビュー。「UAE ザイド大統領のイニシアチブとサウド外相のシリアへの訪問はイ・イ戦争への調停努力である。ザイールの行為に断固とした立場を、他のアラブ諸国もとるべきである。レバノン人民が内紛をやめることが必要である」。

▶ラフサンジャニ・イラン国会議長、「イランに領土的野心はなく、湾岸諸国に侵攻する意思もない。サダムフセインの更迭だけを要求する」と声明。

27日 ▶シュミット西ドイツ首相、「NATO 以外の国には戦車を売らない」と声明。この声明はヘンジャー外相のイスラエル訪問に先立って行なわれたものである。〈A・N〉。

30日 ▶リヤドで GCC 外相会、5月に入って2度目の会合。

31日 ▶GCC 外相会、イランに停戦呼びかけ。イラクには撤兵の意思がある、と声明。OIC、国連、非同盟会議の調停努力に支持を表明。

▶サウド外相、ハーリド王の親書をフセイン・ヨルダン国王に伝達。

▶イリヤニ北イエメン首相他閣僚4名訪サ。ハーリド王と会見。ファハド、アブドゥラ、スルタン同席。

6月

1日 ▶イリヤニ北イエメン首相、会談終え帰国に当り「イラクの権利を守ることはアラブの権利を守ることである」と声明。

4日 ▶サウド外相、ハク・パキスタン大統領、ウルシュ・ドルコ首相と会談。

5日 ▶リヤドで OIC 第1回調停委員会会合（パキスタン、ギニア、バングラデシュ、トルコ、セネガル、マレーシア、PLO）。

6日 ▶OIC 調停委、イラン、イラク両国に調停団派遣（日帰り）。

▶イスラエル・レバノン南部に侵攻開始。サウジ政府抗議声明発表。

7日 ▶ハーリド王、米、英、仏、独、アラブ諸国に「イスラエルの暴挙を中止させよ」と電報。

▶ナイフ内相、初の南イエメン訪問。

8日 ▶ハーリド王、イスラム諸国に「紛争をやめて全ての力をイスラエルとの戦いに向けよ」と呼びかけ。

▶ナイフ内相、ファハド・アルスデイリ・ナジュラン知事、南イエメン内相と会談。

9日 ▶ハーリド王、サルキス・レバノン大統領に全面支持を約す電報。

▶駐サウジ・レバノン大使館、在サウジ・レバノン人に献血呼びかけ。

10日 ▶ハーリド王、クウェートのサアド首相、サバーハ外相と会談。スルタン同席。

▶サウド外相ボンへ急行。レーガン大統領、ゲンジャー西ドイツ外相と会談。イスラエルのレバノン侵攻を中止させるよう要請。

11日 ▶GCC、イラクの対イラン停戦呼びかけを歓迎。

▶サウド外相、パリ着。フランスの対イスラエル強硬姿勢を評価。

▶サルマン・リヤド知事、モロッコでハッサン国王にハーリド王からの親書伝達。

12日 ▶サウド外相、ロンドンでサッチャー首相と会談。アルジェリア経由で帰国。

13日 ▶ハーリド国王死去。即日王族会議でファハドが第5代国王に即位。アブドゥラ国家警備隊長が皇太子兼第1副首相に、スルタン国防相が第2副首相に。他の閣僚は全員留任。王族会議議長はムハマンド王子。

▶サレハ北イエメン大統領、フセイン・イラク大統領、ザイド UAE 大統領、フセイン・ヨルダン国王、シリアのカシム首相、ハダム外相らが弔問。空港出迎えは全てバドル国家警備隊副隊長。

▶南イエメンのアリ議長、PLO のアラファト議長弔

意表明メッセージ。

14日 ▶ムバラクエジプト大統領弔問。ファハド国王と75分間の会談。

▶エルシャド・バングラデシュ参謀総長、スメイリ・スーダン大統領、ハマド・カタール皇太子、カブース・オマーン首長、サアド・クウェート皇太子、ムハマドマザリ・チュニジア首相ら弔問。

▶ファハド王、アラファトに支援を約す電報。

15日 ▶ファハド王、リヤドからジェッダへ移動。

16日 ▶サウド外相、ブッシュ米副大統領と会談。米にイスラエル撤退のための働きかけを要請。

17日 ▶ファハド王、小巡礼のためマッカへ移動。

18日 ▶ファハド王、巡礼終えジェッダに戻る。

19日 ▶ハダム・シリア外相訪サ。サウド外相とパレスチナ問題について会談。

20日 ▶リヤドで GCC 財政相会議。湾岸投資社（GIC）資本金20億円で設立承認。12月から域内生産物の関税撤廃。域内商業活動の自由化、通行の自由化も11月の首脳会議に勧告。

22日 ▶ラマダン（断食月）開始。内務省告示「非ムスリムも公衆の面前で飲食、喫煙をするな」。

23日 ▶サウド外相、PLO 評議員ハリド・ハッサン、レバノン周辺国大使、欧米諸国大使らと個別に会談。レバノン情勢について討議。

24日 ▶スルタン国防相、サウジ国内には外国軍隊、基地は存在しない。サウジ国内では2年前から武器を製造している、と発言。

25日 ▶ヘイグ米国務長官辞任。

26日 ▶ファハド王、レーガン大統領に対しイスラエルの侵略をやめさせるよう警告のメッセージ。

27日 ▶国連安保理でイスラエル制裁案に米が拒否権。サウジ政府、米の拒否権発動に「深い憂慮」を表明。

▶チュニスでアラブ緊急外相会議。レバノン情勢について討議。

29日 ▶フセイン・ヨルダン国王訪サ。ファハド国王と会談。アブドゥラ皇太子、スルタン国防相同席。

30日 ▶アラブ 6カ国外相会合（27日のアラブ外相会で設立）、イスラエルの侵攻に対する対策協議（サウジ、クウェート、レバノン、シリア、アルジェリア、PLO）。先日の外相会議では9カ国（22カ国中）しか参加しなかった。

▶リヤル切下げ。3:43→3:44/円（今年2度目）。1回目は4月5日。

7 月

1日 ▶ブレジネフ、ファハド王に就任祝いのメッセージ。両国の関係改善を望む。

▶PLO アラファト議長、「私はベイルートを離れない」と声明。

▶ファハド王、ハダム・シリア外相と会談。

2日 ▶アラブ6カ国外相委、レバノン右派軍事指令官バシエル・ジェマイエルと「積極的な」話し合い。

3日 ▶ソ連、PLO への直接軍事支援の意思はない、と声明。

▶ヤamani情報相「ジェマイエル・レバノン右派司令官の訪サは6カ国委の招きによるものである」「ジェマイエルに特別の支持を示すものではない」と声明。

4日 ▶アラブ連盟委員会。レバノン情勢討議のため、サバーハ・クウェート外相、ボセッタ・モロッコ外相、カドウミ PLO 政治局長をモスクワへ派遣。

▶ファハド王、カシム・ヨルダン首相と会談。フセイン国王の親書受けとる。

▶サウド外相、レバノン情勢検討のためのアラブ外相会出席。「全てのレベルの外交活動を行なう」と声明。

5日 ▶ファハド王、アサド・シリア大統領と会談（4日夜着）。アブドゥラ皇太子、スルタン国防相、サウド外相同席。

▶アラブ連盟代表団、グロムイコ・ソ連外相と会談。

▶ムバラク・エジプト大統領、サダム・フセイン・イラク大統領からの非同盟会議出席要請受諾。

7日 ▶ファハド王、ノルウェー皇太子と会談。

▶タイプで GCC 外相会開会。レバノン情勢について討議。

8日 ▶OPEC 市場監査委、1750万 BD 上限維持を勧告。数カ国が生産上限を超えているため、現状は1800万 BD に達している。カルデロン・ベネズエラ石油相、リビア、ナイジェリア、イランを名指して非難。

10日 ▶OPEC 石油相会議、生産上限1750万 BD 維持で合意の観測。

11日 ▶OPEC 石油相、生産割当てに合意できず。

▶GCC 緊急外相会、レバノン情勢について協議。

▶サウジ、北イエメン、UNDP、北イエメンの飛行場計画で協力合意。

13日 ▶ファハド王、閣議でレバノン情勢について検討。ファハド王がレーガン米大統領あての書簡と同大統領からの返書を報告。ヤamani情報相、希望を持たせるものであったと発表。

▶GCC 外相会終了。米の拒否権発動を非難。レバノン情勢解決のためのアラブ連盟6カ国委員会を支持。

イ・イ戦争のイラク軍撤退に理解を示す。

15日 ▶サウジ・クウェート、中立地帯に関する「タイフ合意」に合意。中立地帯分割条約に基づく。クウェート側にあるサウジ国民の財産について。過去の3合意（中立地帯分割条約、合意覚書き、リヤド協定）に連なるもの。

18日 ▶サウド外相、ワシントンへ出発。ハダム・シリア外相とともにレーガン米大統領に会見予定。

19日 ▶ラマダンのイラク第1副首相、ファハド王と会談終え帰国。

▶サウド、ハダム両外相、ワシントン着。アラブ連盟調停団の一環。調停団はモスクワ、ロンドン、パリ、ベキンを訪れた。

▶スーダンのヌメイリ大統領、サウジに立寄り、ファハド王と会談。

21日 ▶サウド外相、ハダム・シリア外相、レーガン米大統領と会談。レーガン米大統領にイスラエルの侵攻をやめさせるよう要請。サウジ、シリアはパレスチナ人の一時的な避難を受け入れる用意がある、と両外相声明。

22日 ▶サウド外相、米から帰国。ハダム・シリア外相は英に。

24日 ▶政府、アサド大統領訪サでシリアがサウジに財政援助を求めたという報道を否定。

▶ハビブ米特使、ファハド王、サウド外相らと会談。

▶スルタン国防相、ハマド・バハレーン皇太子兼国防相とともにシャロウラ基地視察。

▶ファハド王、イード祭（ラマダン明け）にあたって施政方針声明（要旨は「参考資料」参照）。

▶アブドゥラ皇太子、イラク訪問。

25日 ▶アブドゥラ皇太子、フセイン・イラク大統領と会談。同日シリアに移動、アサド大統領と会談。アラブの統一政策の一環であり、イラク・シリア間の調停をめざすものではない、と説明。

26日 ▶スルタン国防相とハマド・バハレーン皇太子兼国防相の南部地域視察続く。

27日 ▶アブドゥラ皇太子ダマスカス訪問を終えて定期検診のためジュネーブ着。

28日 ▶ハダム・シリア外相訪サ、ファハド王と会談。

▶アラブ連盟6カ国外相委、安保理5カ国歴訪の成果を報告。

31日 ▶政府、リビア報道機関によるサウジ非難記事について声明。「われわれはこうした中傷に沈黙を守ってきたが、リビアはアラブが団結せねばならない今、サウジに対する不信感を高めアラブを分裂させようとしている」。

8 月

1日 ▶ムスリム世界連盟ハラカン議長、ファハド王のイード声明を評価。4日からの臨時総会の主要テーマになるであろうと声明。

▶クウェートとの中立地帯に関する「タイプ合意」調印。

▶ボセッタ・モロッコ外相、ハッサン国王の親書を持って訪サ。

2日 ▶サレハ北イエメン大統領、アリ南イエメン人民最高会議議長そって訪サ。ファハド王と中東情勢について話し合い。

▶『アルリヤド』は、カダフィの幼稚な行動を非難。またアラブの大義に対する明確な反対である、と論評。

3日 ▶ファハド、サレハ、アリ会談。共同声明——「全アラブはイスラエルに対抗するため分裂をやめて結束せよ」。サウド外相、南北両イエメン外相と個別会談。

5日 ▶ファハド王、レーガン大統領に電話でイスラエルの侵略をやめさせるよう圧力。

6日 ▶サウド外相、南北両イエメン特使と会談。

7日 ▶ヤamani情報相「サウジはモロッコの呼びかけによるアラブ首脳会議再会に賛成である」と声明。

▶カーン・バングラ陸軍参謀長訪サ、ハマド将軍と会談

9日 ▶ヤamani石油相、カーリファ・クウェート石油相と会談。

10日 ▶スルタン国防相、バングラ陸軍参謀長、在欧米軍副司令官シュミット大将と会談。

▶タラール王子、トルコでエブリン大統領と会談。

11日 ▶ボセッタ・モロッコ外相訪サ。ファハド王にハッサン国王からの親書伝達。

13日 ▶ファハド王、レーガン米大統領、サルキス・レバノン大統領、アサド・シリア大統領と電話会談。

14日 ▶ムヒス・バングラ財政相訪サ。

▶ハマド・カタール皇太子兼国防相訪サ（～18日）。

15日 ▶サウド外相シリアでアサド大統領、ハダム外相と会談。ヨルダンでフセイン国王と会談。

▶モヒス・バングラ財政相、アバアルハイル財政相、アリ・イスラム開発銀行総裁と会談。

▶ファハド王、サクル・ラスアルハイマ（UAE）首長と会談。

16日 ▶アスバヒ・北イエメン教育相訪サ。

▶スルタン国防相、ハマド・カタール皇太子兼国防相、ハマド・バハレーン皇太子兼国防相、ジュベイルで会談。

17日 ▶ヤamani情報相、80/81年度のGNP成長率を12%と報告。

18日 ▶ハダム・シリア外相訪サ。ファハド王と会談。

サウド外相同席。

▶ヤamani石油相、ファハド王の親書を持って北イエメン着、サレハ大統領に伝達。

▶ハマド・カタール皇太子帰国に当り「10月のGCC国防相会で共同治安協力協定を検討する」と声明。スルタン国防相、バハレーン＝カタール間には何の紛争も存在していない、と発言。

▶イドリス・エリトリア解放戦線議長訪サ。エリトリア難民にも労働許可を与えるようサウジ政府に要請。

19日 ▶ドーハ・バングラデシュ外相訪サ。

20日 ▶サウジ在住アメリカ人（970人）、レーガン大統領あてにイスラエルを支援する政策に対する抗議の電報を発信。

▶ドーハ・バングラ外相、マンズーリ外務次官と会談。

21日 ▶イリヤニ北イエメン首相、サレハ大統領の親書をファハド王に伝達。スルタン、ヤamani石油相同席。

▶ランステイン西独財政相訪サ。アバアルハイル財政相と会談。

▶ヤamani情報相、PLOのベイルート撤退に関して声明。「ベイルートからの撤退はパレスチナ帰還への第一歩である。サウジはファハド王のもとで、パレスチナ人が祖国に帰る日まで支援を続ける」。

▶ニジェールでOIC外相会開会。サウド外相、マンズーリ外務次官ら出席。

24日 ▶タイプ・スーダン副大統領訪サ。ファハド王にヌメイリ大統領の親書渡す。

25日 ▶サウジ政府「レバノン大統領選でバシル・ジェマイエル当選のためにサウジが働いた」というUPI電を否定。

▶サウド外相、シリアでアサド大統領、ハダム外相と会談。ヨルダンでフセイン国王と会談。シリア、ヨルダン、アラブ首脳会議出席を表明。

27日 ▶ファハド王、行政改革案を承認。10月1日から実施。内務省が社会・治安上の責任をより効率的に果たせるようにする措置。

28日 ▶モロッコでアラブ緊急外相会。リビア、エジプトを除く20カ国が参加。

29日 ▶ビシャラGCC事務局長、イスラエルの次の標的はGCC諸国かもしれない、と警告。

▶店舗用レンタルフィー値上げ規制を10月18日から解除と決定。

30日 ▶アラファトPLO議長、ベイルートから退去。ファハド王あて支援感謝の電報送る。

31日 ▶米アイオワでサウジ人留学生5人が襲われ負傷、5台の車が破壊された。

▶フセイン・ヨルダン国王訪サ。ファハド王と会談。

9 月

1日 ▶フセイン国王ファハド王との会談終え帰国。

▶レーガン米大統領、中東和平新提案。

2日 ▶ヤマニ情報相、レーガン提案について検討中であると語る。

3日 ▶財政省、近くリヤドで高等レベル委員会。特殊金融機関の組織改正のための話し合い。

▶商業省、エンジニアリング系コンサルティング会社に関する運達。活動規制を強化。

4日 ▶ファハド王、PLO 執行委員マフムード・アバスと会談。アブドゥラ皇太子、サウド外相出席。

5日 ▶ファハド王、ラバト到着。サウド外相、ヤマニ石油相、アルゴサイビ工電相、アフマド・ワッハービ儀典局長、マンズーリ外務次官らが同行。

6日 ▶再開アラブ首脳会議開始。

▶株式市場設立についてはさらに2年間検討。

7日 ▶アラブ首脳会議2日目、イスラエルの地位について秘密討議続く。アラブの二つの案とレーガン提案が議題。

▶外務省、内務省、家雇い労働者に関する委員会設置。

8日 ▶アラブ首脳会議、包括和平案を採択の模様。アラブ代表団を各国に派遣の予定。アラファト PLO 議長を含むかどうかは未定。

9日 ▶アラブ和平案・フェズ憲章発表（「参考資料」参照）、イスラエルの撤退と PLO の承認を求めるもの。会議はレーガン提案にどこまで応えるかについて討論された。9日夜終了。代表団を米に派遣決定。

▶イラン巡礼団、デモを企て警官隊と衝突。「イランはこのようなことが起こらないように誓約したのに約束を破った」と内務省発表。

10日 ▶警官隊と数千人のイラン巡礼団2度目の衝突、写真、プラカードを没収。ホエニハ師に率いられている。

12日 ▶イラン人巡礼者のうち21人を逮捕、国外退去の予定。テヘランラジオの報道とは違い、だれも負傷していない、と内務省発表。

▶アラブ7人委員会結成、米国その他国連安保理事国と連絡をとる。メンバー：ファハド・サウジ国王、アラファト・PLO 議長、ハッサン2世モロッコ国王、フセイン・ヨルダン国王、アサド・シリア大統領、シャドリ・アルジェリア大統領、ブルギバ・チュニジア大統領。

▶ノット英国防相訪サ。スルタン国防相と会談。

13日 ▶ノット英国防相、アブドゥラ皇太子と会談。

▶SABIC 資本の75%を民間化する方針発表。

14日 ▶ファハド王、フェズから帰国。

16日 ▶ファハド王、ワザン・レバノン首相、サエブ・

サラム前首相とレバノン情勢について電話会談。

▶ブレジネフ書記長、6項目の中東和平案を提示。

19日 ▶サウジ、西バイルートの難民虐殺に抗議。ファハド王「悲しみと苦痛」を表明。「シオニストのくり返す攻撃に対抗するよう」呼びかけ。

▶ファハド王、サルキス・レバノン大統領、ワザン同国首相に電報。

20日 ▶モルジブ大統領マアムン・アブドル・カヨウム、巡礼のため訪サ。

▶ファハド王、アラファト議長を出迎え（～22日）。アブドゥラ皇太子、マジェド・マッカ知事同席。

21日 ▶ファハド王、アラファト議長と会談。アブドゥラ皇太子、スルタン国防相、サウド外相同席。PLO 側からアブ・ジハド副司令官、ナトシャ駐サウジ代表参加。

▶サウド外相、アラファト議長個別会談。

22日 ▶エルシャド・バングラ参謀長、巡礼のため訪サ。ドーハ外相も伴う。バングラ巡礼者2万人。

▶ムスリム世界連盟ハラカン、世界中のイマーム（導師）に、24日（金）の説教でイスラエルによる虐殺について言及するようアピール。

▶ファハド王、連日各国巡礼団代表と会見続く。

▶マンズーリ外務次官、「建国記念日に関する在外公館での全ての行事は中止。虐殺をうけた全てのパレスチナ人との連帯を示すため」「記念行事用の資金はパレスチナ人、レバノン人救済用資金とされる」と発表。

▶ファハド王、アミン・ジェマイエル・レバノン新大統領に祝意と激励の電報。

23日 ▶サウド外相、アンマンでフセイン国王と会談。

▶サウジ建国50周年記念日。

24日 ▶サウジ政府、テヘランラジオ報道（イラン巡礼者がハラムモスクでハンガーストライキに入り、こん棒をもった警官隊がさい涙ガスで解散させた）を否定。

▶セク・トゥーレ・ギニア大統領、巡礼のため訪サ。

▶23日までの巡礼者約85万人（海路8万人、空路60万人、陸路17万人）。昨年度比約2万6000人減（0.03%）。

25日 ▶アラファト議長アデンから訪サ（～29日）。

27日 ▶犠牲祭（イードル・アドハ）。

▶ファハド王、ムスリムの連帯を訴えるアピール。レバノン問題、アフガン問題、イ・イ戦争について言及。

29日 ▶エルシャド・バングラ参謀長、フェズ憲章を支持。バングラデシュへのサウジ投資を要請。

▶ファハド王、ハビフ米特使と会見。

▶サウジ、「ファハド王がイスラエルのシャロン国防相と会った」というリビアの報道を否定。

30日 ▶アラファト議長、ダマスカスからジェッダ着。

10月

2日 ▶初のヤンブーからの LPG 船 (ブタン10万5000バレル, プロパン19万バレル) 出港。

3日 ▶サウジ王室声明, 「イ・イ戦争の新たな戦闘に遺憾の意」「イラク側の停戦よびかけにイランが応じるように要請」。

5日 ▶シャエル駐レバノン大使, ジェマイエル・レバノン大統領と会談。

8日 ▶イラン巡礼者数千人がメディナで政治スローガンを掲げてデモ。治安隊が解散させ, 69人を逮捕。直ちにイランに向け強制出国。ホエニハ師の指示によるもの。

▶(ワシントン): 第7回サウジ・米合同委員会開会。アバアルハイル財政相, リーガン米財務長官出席。サウジ実業家スレイマン=オライヤン, 「サウジ投資に対する米の課税をなくすことが必要」と演説。

9日 ▶ファハド王, フセイン・イラク大統領からの親書受けとる。サドウン・イラク内相が伝達。アブドゥラ皇太子, サウド外相同席。

▶公務員就業規則改正案。週5日労働。1日8時間。ラマダン中と盛夏3カ月は7時から休みなしで1時まで6時間。公務員の副業防止のため。

▶ナイフ内相, 「イラン人・サウジ警官隊の衝突によりイラン人にケガ人発生」とのイラン側の報道を否定。

10日 ▶GCC 国防相会議開始。アブドゥラ皇太子開会演説。スルタン国防相, 「9カ月前の国防相会議(1月, リヤド)以来起こった危機的な出来事」について言及。

11日 ▶ジャゼイリ保健相, WHO 地域代表になるため辞任, 閣議, イ・イ戦争の進展について検討。GCC 国防相会議, 米・サウジ合同委員会の結果報告。

▶GCC 国防相会議終了。三つの決議採択。(1)GCC 諸国間の治安協力に対する信頼と確信。(2)湾岸の治安は, この地域の全人民の責任において, 一体不可分なものとして強化されるべきこと。(3)地域の安全は統一されたGCC 戦略の枠組の中で強化される。

▶シャエル駐レバノン大使, ジェマイエル・レバノン大統領と会談。

13日 ▶ナイフ内相, 「今年のイラン人の巡礼地での暴動はホメイニ師のさしがねによるものである」「イランのよびかけは他のイスラム国からの巡礼者の1人からも賛同されなかった」「ホメイニ師の計画の第1段階はデモによるもの, 第2段階は武力によるものであったが, 武器はすべてイランへ送り返された。」と発表。

▶GCC 石油相会議。オタイバ・UAE 石油相による市場監査委員会の報告。

14日 ▶サウジ, 「エジプト=スーダン合意についてい

かなる調停工作もしていない」と発表。

15日 ▶ユースフ・シラウィ・バハレーン工業相, 他のメンバーがさまざまな形で値下げを行なうようなら GCC は OPEC から脱退するかもしれぬ, と発言。

▶サウド外相ヨルダン着。アラブ連盟の7人委員会についてフセイン同国王, ファイサル王子と会談。その後カセム・ヨルダン外相とともにモロッコへ出発。

17日 ▶GCC 内相会議。集団安保を決定。クウェートの「保留」はないと声明。

18日 ▶今日からレンタルフィー値上げ規制解除 (イスラム暦1403年元日)。

19日 ▶ゴザイビ工電相, 保健相代行に任命。

20日 ▶ハッサン・モロッコ国王, 7人委員会代表としてワシントンに出発。サウド外相, アルジェリア, ヨルダン, モロッコ, シリア, チュニジア各外相, PLO ハーリド・ハッサン政治局員同行。

▶PLO アラファト議長訪サ。同日出発。ファハド王と会談。スルタン国防相同席。

21日 ▶アフメド・バングラ労働相, アンカリ労働相と会談。

23日 ▶ハマド・バハレーン皇太子着。ファハド王と会見。アブドゥラ皇太子, スルタン国防相, ムハンマド・バハレーン外相同席。イサンバハレーン首長の親書伝達。

24日 ▶GCC 工業相会議開始。ゴザイビ工電相基調報告。12月1日からGCC の関税を撤廃することを検討。

26日 ▶第3回 AIDO (工業開発アラブ機構) 開会。ゴザイビ工電相, ファハド王のメッセージを伝え, アラブの経済統合をよびかけ。

▶クワイズ GCC 事務次長, 「工業相会で12月から関税廃止。運輸システム, 港湾規制について合意」と発表。

27日 ▶アラブ7人委員会, 常任理事国訪問を延期。当初, サウジ, シリア, チュニジア, モロッコが米・英, アルジェリア, ヨルダン, PLO がソ・中・仏訪問の予定。PLO が全ての国への派遣を要請したため中断。

30日 ▶ファハド王, ハッサン・モロッコ国王からの親書を受けとる。ボセッタ・モロッコ外相が伝達。

▶サウド外相, ジュレイロ・ブラジル外相と会談。

▶GOC 商業相会議開始 (31日まで)。首脳会議前の一連の閣僚会議の最後, サウジは二つの作業書を提出。経済協力協定について, 統一測定機構について。スレイマン商業相, 「外国輸出業者の価格つり上げに対抗する」「商工会議所のより緊密な交流を期待」と発言。

31日 ▶ファハド王, メディナ地区を視察開始 (3日まで)。

11月

1日 ▶(マナーマ) : GCC 外相会議。首脳会議の準備。
▶グエレイロ・ブラジル外相訪問終了(30日～)、「フエズ憲章を支持」との共同声明発表。

3日 ▶GCC 外相会議, 集団安保条約枠組に合意。

▶ファハド王, ラバトに到着。2度目の外遊。

▶アブドゥル・ラフマン王子, 国防副大臣に任命。

4日 ▶ファハド王, ハッサン・モロッコ国王と会談。
7人委の活動について。サウジ, ポセッタ両国外相同席。
訪米の成果, 他の安保理事国への訪問についても検討。

5日 ▶ナイフ内相, 北部視察旅行。部族代表と会談。

▶サウジ商工会議所(2万人のメンバー), 輸入にまつわる不利益からメンバーを守るための手段に着手。

6日 ▶ヤンブー工業港に西ドイツから。最初の着船。

▶南イエメン内相ビタニ大佐到着。国境問題について。

▶ファハド王, 帰国。ジェッタ着。

7日 ▶ナイフ内相, ビタニ・南イエメン内相と会談開始。国境問題について。「会談は両国の関係を軌道にのせるための大きな一歩である」とナイフ内相。アフマド内務副大臣, ファハド・ステイリ・ナジュラン知事, アワジ内務次官, ジャワズ内務次官, ムハマド・ヒラル国境警備隊長, 内務局長ら同席。

8日 ▶ファハド王, GCC 首脳会議に向けてバハレーンに出発。アブドゥラ皇太子に代行指令。

▶アブドゥラ皇太子, ビタニ・南イエメン内相と会見。

9日 ▶GCC 第3回首脳会議開始。イサ・バハレーン首長, 「首脳会議では軍事, 治安, 経済, 社会, 文化の完全な統一戦略が決定される」と発言。

▶ナワフ・クウェート内相欠席のため治安協力協定問題が話し合えない(サウジ・ラジオ)。

▶「保健省行政改革キャンペーン」強力に推進中。地域病院査察団に強い権限を付与。

11日 ▶ファハド王, イサ・バハレーン首長, サウジ・バハレーン架橋の記念板除幕式に出席。

▶GCC 首脳会議終了。共同防衛についての決定は延期(共同声明の内容については「参考資料」参照)。イ・イ戦争の早期終結を主張, 停戦に向けてのイラクの努力を支持, 21億ドルの GIO の設立。経済統合発効は12月1日から3月1日に延期。

▶ファハド王, 夜リヤド着。市民の大歓迎を受ける。アブドゥラ皇太子出迎え。

▶フセイン・ヨルダン国王到着。ファハド王出迎え。

▶政府機関による受注先の固定化を防ぎ入札は公平にするようファハド王指令。

13日 ▶ナイフ内相, GCC 首脳会議について言及。「ク

ウェートは集団安全保障条約調印への意志を示した」「オマーンと南イエメンの国交正常化は半島の利益になうもの」と期待する。

14日 ▶ジェマイエル・レバノン大統領, サウジ到着(ファハド王, アブドゥラ皇太子, スルタン 国防相出迎え)。ワザン首相も同行。サウジ外相と会談。

15日 ▶ロカド仏計画相, ヤマニ石油相と会談。ターヘル・ペトロミン総裁とも会談。

▶閣議。ジェマイエル・レバノン大統領との会談について, GCC 首脳会議について報告。

17日 ▶アルゴサイビ工電相, ファド次官, オマーン建国記念日式典出席のためマスク着用。

▶韓国副建設大臣, マンズーリ運輸相と会談。

▶ヤマニ石油相, クウェートでジャビル首長と会見。ファハド王の親書を伝達。

19日 ▶湾岸商工農会議, 「GCC 国民は平等な経済的地位を享受できるようになる」と発表。

20日 ▶アブドゥル・ラフマン副国防相, 海軍施設視察。

21日 ▶ファハド王, アルジェリア訪問。パレスチナ問題, 西サハラ問題が中心課題。アルジェリアのイ・イ戦争調停再開も期待。サウジ外相, ヤマニ石油相, アンカリ労相, ナーゼル企画相ら同行。到着時演説, 「訪問はアラブの統一の達成のための一手段である。シャドリ大統領と積極的な合意に到達できることを期待している」。

22日 ▶ファハド王, シャドリ大統領と会談。

▶ジャカルタでサウジ=インドネシア合同委員会開始。アリレザ経済担当外務次官代表。

23日 ▶ファハド王・シャドリ共同声明。「中東の永続的な平和はパレスチナ問題の解決なしにはありえない。イラン・イラク戦争の継続は重大な懸念。ナイロビ合意に基づく西サハラ紛争の解決努力を続ける」「フエズサミット合意の遂行を確認」。

▶ファハド王, シャドリ・アルジェリア大統領, アラファト PLO 議長との3者会談。

24日 ▶ファハド王, フェズ入り。サウジ外相, ヤマニ石油相ら同行。

26日 ▶ベルギー皇太子, 大使節団を率いて到着。

27日 ▶アラブ7人委員会, 訪英予定を中止。英の PLO の受入れ拒否のため。

▶ファハド王, フェズでザイド UAE 首長と会談。

▶ファハド王, ハッサン・モロッコ国王と会談。

▶商業供給省, 東南アジアからの食料以外の全ての輸入品について検査する, 模造・劣質のため, と発表。

29日 ▶アブドゥラ皇太子, アルバート・ベルギー皇太子と会見。スレイマン運輸相同席。

30日 ▶フェズでファハド王, ハビブ米特使と会談。

12月

1日 ▶ダウケミカル社、SABIC との合弁石油化学プロジェクト（ペトロケミヤ）からの撤退発表。

2日 ▶アラブ連盟7人（外相）委員会、フセイン・ヨルダン国王に率いられてモスクワ入り。サウド外相含む。

▶ボールドリッジ米商務長官訪サ（～6日）。

3日 ▶アラブ7人委、アンドロポフ書記長と会談。

4日 ▶スルタン国防相、レバノン内のイスラエル軍が撤退しないと、レバノンへの援助は難しい、と発言。

▶サウド外相、グロムイコ外相と会談。グロムイコ、フェズ憲章への支持表明。サウド、アフガン侵攻を批判。

5日 ▶アラブ7人委、北京着。サウド外相、サウジの外相として初の訪中。

▶PLO アラファト議長、アデンからリヤド着。

▶マールーフ・イラク副大統領、フセイン大統領の親書を持って訪サ。

▶ロンドンスポット市場でアラビアンライト30^Fを割る。

6日 ▶アブドゥラ皇太子、アラファトと会談。

▶アラブ7人委、趙首相と会談。趙首相、アラブ和平案の支持を表明。

▶<SAMA>82年前半石油生産は前年比30%減の12億6500万バレル。

7日 ▶SAMA 海外局長、サウジはまもなく資金需要のため資産をとりくずす時がくるので、今後の投外資産は短期投資に向かうであろう、と発言。

▶ファハド王、マドリッド訪問。カルロス・スペイン国王と会談。

8日 ▶<ニュー・ヨーク金融筋>サウジの第3四半期国際収支赤字転落（海外資産収入を加えても）。

9日 ▶カイヤル郵便電信大臣、次期5カ年計画中に電話業務は民営化する、と発表。

11日 ▶ヤamani情報相、現在のところソ連、中国と国交を結ぶ計画はない、と発表。

12日 ▶リヤドで第1回GCC 司法相会議（～14日）。ジャーリアにもとづく刑法、商法の統一委員会設置を決定。

13日 ▶ナイフ内相、アラブ内相会議のためカサブランカ着。イラク、モロッコ各内相と会談。

▶リヤドで英・サウジ経済合同委員会開始。

▶ジャンフェリ・オマーン石油相リヤド着。ヤamani石油相と会談。

▶北イエメンで大地震、サウジ被害救済のために救済物資を空輸開始。

14日 ▶OIC・シャティ事務局長、ジャカルタでスハル

ト大統領と会談。

16日 ▶駐北イエメン・ハリシ大使、サウル北イエメン外相と会談。地震被害救済について。

▶駐サ北イエメン大使、サウジ国内の北イエメン人に対して資金援助要請。

17日 ▶<MEES>ヤamani石油相「OPECメンバーが価格についての合意に従わないなら、サウジは34^Fにこだわらない」「ディファレンシャル問題が解決しなければOPECの価格戦略にしばられない」と発言。

▶SAMA 81/82年度の民間輸入統計を発表。前年比13%増の580億SRに。

18日 ▶湾岸商工農会議所連盟、「湾岸共同輸入会社」の設立を提唱。

20日 ▶<オカーズ他>ファハド王は近日中にアラブ統一のための活動を再開。(1)リヤドでヨルダン、イラク、シリア、PLOの首脳を集めて会議を行ない、パレスチナ問題とシリア＝ヨルダン問題の解決をはかる、(2)モロッコ・アルジェリア両国首脳会談をリヤドで行ない、西サハラ問題の解決をはかる、(3)シリア＝イラクの調停も行ない、パイプラインも再開させる。

▶OPEC 66回定期総会、生割割当て調整に失敗。

21日 ▶アブドゥラ皇太子、デロール仏経済相と会談。アバアルハイル財政相同席。

22日 ▶王室「ファハド王がマドリッドでモロッコ＝アルジェリア首脳会を持つ」という報道を否定。

▶IMF サウジに出資拡大を期待。

24日 ▶アルゴザイビ工業電力相、完成および半完成のアルミパイプに対する関税引上げ（3%→20%）発表。

25日 ▶政府「外務省・宗教界の代表がテヘラン＝行き、ホメイニに対してウムラ（小巡礼）のための訪サ要請」という報道を否定。

▶マナーマでGCC 財政相会談（～26日）。関税統一について準備。

26日 ▶ファハド王帰国（11月21日以来5週間ぶり）。

27日 ▶ハマド国軍参謀総長・將軍、パキスタン、バンラデシュ訪問に出発。

29日 ▶<アッシャーサ>ナイフ内相、「GCCは加盟国内での覇権をめざすものでも、他の国に脅威を与えるものでもない」「GCC集団安全保障条約について、クウェートは犯罪人引渡し条項があるために現在反対しているが、サウジは不完全な形での条約締結は望まない」と発言。

30日 ▶OIC シャティ事務局長、パキスタンでハク大統領と会談。

31日 ▶アルゴザイビ工業電力相、ジュベイル製鉄所完成を発表。

参 考 資 料

サウジアラビア 1982年

1. 地域国際機関主要役職
2. サウジアラビア閣僚名簿
3. その他主要役職
4. 国軍, 国家警備隊
5. 州 知 事
6. ファハド新国王イード声明 (要旨)
7. 国家予算
8. OPEC の働き
フェズ憲章はアラブ・イスラエル関係「参考資料」参照。第3回
GCC 首脳会議共同声明はアラビア半島諸国「参考資料」参照。

㊦ 地域国際機関主要役職

アラブ連盟 事務総長 Chadli Klibi (チュニジア)
 イスラム諸国機構 (OIC) 事務総長 Habib Chatti (チュニジア)

ムスリム世界連盟事務総長 (MWL) Sh. Mohammad Ali al Harakan (サウジアラビア)

OPEC 事務総長 Marc Saturnin Nar Nugema (ガボン)

OAPEC 事務総長 Ali Ahmad Attiga (リビア)
 イスラム開発銀行 (IDB) 総裁 Ahmed Mohammad Ali
 GCC (湾岸協力評議会)

事務局長 Abdullah Yacoub Bishara (クウェート)

政治担当副事務局長 Ibrahim Mahmoud al-Subhi

経済担当副事務局長 Dr. Abdullah al Quwais

軍事担当副事務局長 Ibrahim Noban

GOIC (湾岸工業評議会機構)

事務局長 Abdullah Hamad al Majed

㊦ サウジアラビア閣僚名簿

国 王 Fahd ibn Abdul Aziz al Saud
 (6月13日 第4代ハーリド国王死去により即位)

皇 太 子 Abdullah ibn Abdul Aziz al Saud
 (6月13日 ファハド皇太子国王即位により任命)

首 相 ファハド国王

第1副首相 アブドゥラ皇太子

第2副首相・国防航空相 Pr. Sultan ibn Abdul Aziz al Saud

外 務 相 Pr. Saud ibn Faisal ibn Abdul Aziz al Saud

石油鉱物資源相 Ahmad Zaki Yamani

情 報 相 Mohammad Abdo Yamani

内 務 相 Pr. Naif ibn Abdul Aziz al Saud

財政国家経済相 Sh. Mohammad al Ali Abal Khail

企 画 相 Hisham Moheddin Nazer

工 業 電 力 相 Dr. Ghazi Abdul Rahman al Gosaibi

商 業 供 給 相 Sulaiman Abdul Aziz al Sulaim

郵 便 電 信 電 話 相 Alawi Darwish Kayyal

農 業 水 利 相 Abdul Rahman Abdul Aziz al Sheikh

労働社会問題相 Ibrahim ibn Abdullah al Anqari

公共事業住宅相 Pr. Mited ibn Abdul Aziz al Saud

都 市 村 落 相 Pr. Mited が兼任

運 輸 相 Hussein Ibrahim al Mansouri

保 健 相 Hussein Abdul Razzaq al Jazaeri

(10月11日 WHO 地域代表に就任のため
 辞任, アルゴサイビ工業電力相が兼任)

教 育 相 Abdul Aziz Abdullah al Khuwaitir

高 等 教 育 相 Hasan ibn Abdullah al Sheikh

司 法 相 Ibrahim ibn Mohammad ibn Ibrahim al Sheikh

巡礼宗教財務相 Abdul Wahhab Ahmad Abdul Wasi

国 務 相 Sh. Mohammad Ibrahim Masoud

国 務 相 Dr. Mohammad Abdul Latif al Melhim

閣僚級待遇

マッカ州知事 Pr. Majid ibn Abdul Aziz al Saud

中央情報局長 Pr. Turki ibn Faisal ibn Abdul Aziz al Saud

国防航空省顧問 Sh. Kamil Sindi

同 上 Sh. Othman al Humaid

㊦ その他主要役職

国防航空省副大臣 Pr. Abdul-Rahman ibn Abdul Aziz al Saud

内務省副大臣 Pr. Ahmad ibn Abdul Aziz al Saud

OPEC 担当石油次官 Sh. Abdul Aziz al Abdullah al Turki

政策担当外務次官 Sh. Abdul Rahman Mansouri

行政担当外務次官 Sh. Abdul Aziz al Thnaiyan

経済担当外務次官 Sh. Abdullah Mohammad **Alireza**

SAMA (サウジアラビア通貨基金)

総 裁 Abdul Aziz ibn Zaid al **Quraishi**

SABIC (サウジアラビア基幹産業公社)

総 裁 Fayez Ibrahi **Badr**

ペトロミン (石油鉱物資源公社)

総 裁 Abdul Hady Hassan **Taher**

ジュベイル・ヤンブー王立委員会

事務局長 Dr. **Farouk** Mohammad Akhdar

4 国軍, 国家警備隊

<国軍>

参謀総長 Muhammad Saleh al Hammad 大将

陸軍司令官 Abdul Mohsin al Omran 少将

空軍司令官 Muhammad Sabri 少将

海軍司令官 Muhammad Bakrati 准将

<国家警備隊>

総司令官 Abdullah 皇太子

副司令官 Pr. **Badr** ibn Abdul Aziz al Saud

副司令官補佐 Sh. Abdul Aziz Abdul Mohsen al **Tuweijiri**

<その他>

治安維持(警察)総司令官 Abdullah ibn Abdul Rahman al **Sheikh**

国境沿岸警備隊総司令官 Mohammad ibn Hilal 少将

5 州知事

マ ッ カ Pr. **Majid** ibn Abdul Aziz al Saud

リ ヤ ド Pr. **Salman** ibn Abdul Aziz al Saud

メ デ ィ ナ Pr. **Abdul-Mohsen** ibn Abdul Aziz al Saud

ハ イ ル Pr. **Migren** ibn Abdul Aziz al Saud

東 部 Pr. Abdul-Mohsen ibn Abdullah ibn **Jilwi**

北 部 辺 境 Pr. Abdullah ibn Abdul Aziz ibn **Musaed** al Saud

カ シ ム Pr. **Abdul-Illah** ibn Abdul Aziz al Saud

クライヤト
ジ ャ ウ フ Pr. **Abdul-Rahman** ibn Ahmad al Sudairi

北 部 Pr. **Abdul Majid** ibn Abdul Aziz al Saud

ナ ジ ュ ラ ン **Fahd** ibn Khalid al Sudairi

ジ ザ ン Sh. **Muhammad** al Sudairi

バ ハ Ibrahim ibn Abdul Aziz ibn **Ibrahim**

ア シ ー ル Pr. **Khalid** ibn Faisal ibn Abdul Aziz al Saud

6 ファハド新国王イード (ラマダン明け) 施政方針声明 (要旨) (1982年7月23日(金))

▶ われわれの内政は、イスラムの原則に従っており、政策はイスラムにのっとり、重要な人物からの意見と援助によって決定される。これはわれわれの先人たちが行なってきたことである。

▶ サウジ社会の進歩に伴い政府のやり方、方式もそれにふさわしいものに進歩する必要が生じてきた。このために政府の基本的な体制は法令化されねばならない。故ハーリド王は政府と諮問議会の基本的な体制の主要な原則を定めるために、高官と有識者による委員会を指名した。これがこの問題の最前線をつとめることになるであろう。そして委員会はコーランに照して政府の責任、権利、義務、政府制度の規則を示す政府の総合制度の最終草案を提出するであろう。これに先立って地方制度の改善、すべてのレベルの政府の組織化が行なわれねばならない。

▶ われわれは必要なインフラの整備をめざす、二つの5カ年計画を成功裡に達成した。そのおかげで国民は先進国レベルのサービスを受けている。われわれの吸収能力について疑った外国人こそ今この事実を認めるべきである。われわれは前の二つの計画同様に今計画が成功するようアッラーに祈る。その時われわれはより多様化した生産の基礎へ経済基盤を導いたことになる。この最初の成果はもう手の届くところにあり、基幹産業の建設、国内消費物質の生産増加、多量の埋蔵量が期待される鉱物資源開発への努力を続けている。

▶ 王国内での農業の成果を誇ることができる。さまざまな農産物を自給できる日がくるであろう。この国家的重要な目標のために政府は援助を与える。次の5カ年計画では二つの重点がおかれる。開発に貢献するために力を尽し、その受益に値する人物の育成と生活環境の改善。国民間の収入の適正配分は常に重要な目標である。都市の活動や工業化、建設ブームの中心からどれほど離れていてもすべての国民は王国の豊かな資源を享受できる。教育の急速な普及を維持し、質・量ともに高めることが必要である。

▶ 軍隊の増強は最大の優先事項である。わが国の安全と平穩を侵そうとするいかなる敵も撃退できるよう機械化装備を行なうことにどんな努力も惜しまない。

石油戦略についてのわれわれの言葉が真実であり、計算が正確であったことを時間が証明した。もし他国がわれわれの言うことを注意深く聞いていれば、アラブ集団石油戦略は弱まることはなかったであろう。

われわれは発展途上国の利益を、われわれの国自身や世界全体の利益と同じように考慮すべきである。

▷ 若者よ、君たちの信仰を強く持ち、理想と価値を固守せよ。自分のペースを決して乱すな。君たちは君たちの文化を再建する機会を与えられている。もしこれをおろそかにすれば、二度と得ることはできなくなってしまう。巨大な責任が君たちの肩にかかっている。君たちは現在の建設の支柱であり、将来のさらなる発展の指導者である。

▷ 王国の石油政策は不変である。それは国益と将来の世代の利益に基づいており、私利や偏見に基づく外国の圧力によって変化されることはない。

▷ レバノン情勢は悲劇であり、イスラエルは横暴さのすべての限度を超えている。イスラエルは全滅のための全面戦争を開始した。老人、婦人、何の罪もない子供を世界の良心の前で殺している。われわれはすべての国際レベルでの努力を、イスラエルの攻撃の停止、撤退のために今まで行ってきたし、今後も続けていく。

われわれはアラブの分裂が早く消滅し、兄弟国エジプトがアラブの統一に復帰する日が遠からずくることを心から望む。それによってわれわれの力は強められ、分裂も終わる。

▷ GCC はアラブ連盟の枠組の中で、強力で有効な道

具として設立されたのであり、GCC はアラブ兄弟国の協力のモデルであり、アラブ連盟を強める支柱となり、アラブを守るたてとなり、損害を防ぎ、共有するべきなを深めることになる。

▷ OIC はイスラムの指導者によって設立されたものである。OIC はやっとな最初の段階を通過したばかりであり、なすべきことは多くある。もしわれわれが望むような力を OIC が持っていれば、二つの兄弟国イランとイラクの戦争は起こらなかったであろうし、イスラム教徒同士が血を流すこともなかったであろうし、イスラムの分裂が深まることもなかったであろうし、イスラム国家が破滅のえじきになることもなかったであろう。もし、イスラム国家が統一を実現できていれば、イスラエルはレバノンで数千の罪もない婦人や子供を殺すような横暴を働かなかったであろう。しかしイスラムの敵によってたくらまれた行為はそれにとどまらない。それは侵略と占領にとどまらない。これは敵の計略の明白な表明でしかない。もっと恐るべきことは敵が二つの恐ろしい武器を用いてわれわれと戦おうとすることである。われわれの国家間に分裂の種をまくこと、若者をして過激化させることである。

新旧を問わず帝国主義はイスラム国家間の混乱をおおきく、いくつかのイスラム国家内での過激派の急進的な運動を助長した責任をのがれるものとは思わない。これらの運動は東西陣営が犯してきた不正から発し、イスラムの国民の中にある不満を内部での暴力に転化させようとするものである。

㊦ 国家予算 (1982年4月23日閣議承認、1982年4月24日～1983年4月12日)

第1表 サウジアラビア国家予算

(単位: 100万SR)

	1980/81予算			1981/82予算			1982/83予算		
	額	構成比 (%)	対前年度比増減 (%)	額	構成比 (%)	対前年度比増減 (%)	額	構成比 (%)	対前年度比増減 (%)
国防・治安	68,495	28.1	16	28,533	27.7	19.7	92,889	29.6	12.5
運輸・通信	32,079	13.1	30	25,343	11.9	37.5	32,532	10.3	△ 8.5
人材育成	22,604	9.2	23	26,248	8.8	16.1	31,864	10.2	21.4
地方事業	19,745	8.1	55	26,292	8.8	33.2	26,224	8.4	△ 0.3
国内金融	19,480	8.0	n. a	24,850	8.3	27.4	23,382	7.5	△ 5.9
経済開発	21,601	8.8	31	22,679	7.6	9.1	22,045	7.0	△ 2.8
一般行政	15,799	6.5	21	21,844	7.3	89.0	9,480	3.0	△ 56.6
保健・社会サービス	12,334	5.0	25	13,716	4.6	7.0	17,010	5.4	24.0
インフラストラクチャー	11,844	4.8	n. a	14,126	4.7	19.5	11,705	3.7	△ 17.1
地方補助金	5,100	2.1	n. a	9,100	3.0	78.4	11,162	3.6	22.7
その他	15,469	6.3	n. a	21,269	7.1	△ 58.1	35,107	2.1	65.1
支出計	245,000	100.0	13	298,000	100.0	21.6	313,400	100.0	5.2
(同実績)	236,600	96.6		288,174	96.7				
歳入(予定)	263,000			340,000		29.3	313,400		△ 8.7

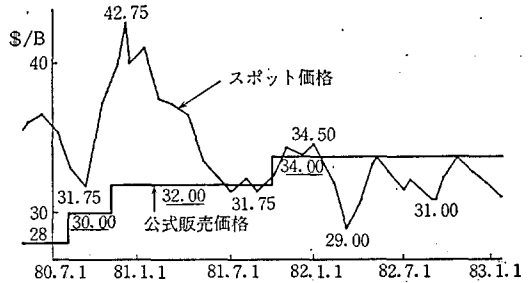
(出所) Arab News および MEED.

8 OPEC の動き

1月28日 ▶アラビアン・ライト (AL) スポット価格 34^{ドル}を下回る。
 2月17日 ▶AL スポット価30^{ドル}割れ。
 2月22日 ▶イラニアン・ライト2月に入って3度目の値下げ。総計4ドル下げで30.2ドルに。
 ▶UAE 石油相,石油相会呼びかけ。サウジ同意せず。
 3月1日 ▶メキシコ1.5~2.5^{ドル}下げ。
 ▶北海(フォーティーズ)4^{ドル}下げ31^{ドル}に。
 3月9日 ▶AL スポット価28.5^{ドル}。
 3月19日 ▶OPEC石油相会(ウィーン)。生産上限1750万BD, 生産割当て決定。基準価34^{ドル}維持。
 3月27日 ▶ナイジェリアに値下げ圧力かける石油会社に対し, サウジなど湾岸諸国が供給停止の警告。
 4月9日 ▶イラニアン・ライト長期契約で25~26^{ドル}を提示。
 5月12日 ▶AL スポット価34^{ドル}回復。
 5月16日 ▶ナイジェリア生産, 130万BDに回復。
 5月21日 ▶第64回OPEC総会(キト)。3月の決定維持。メキシコの参加はならず。
 5月28日 ▶北海(フォーティーズ)33.5^{ドル}に上げ。
 7月9日(~11日) ▶第65回臨時総会。割当て見直し議論, ベネズエラはイランの割当てオーバーを非難。新割当て決まらず決裂。
 8月20日, 9月20日 ▶市場監視委。まともならず。

10月5日 ▶28日に石油相会議開催発表。
 10月12日 ▶UAE 石油相, 石油相会延期発表。
 11月12日 ▶ナイジェリア, ディフェレンシャルをめぐる意見対立から, 12月総会の開催地を辞退。
 12月3日 ▶AL スポット価再び30^{ドル}割れ。
 12月10日 ▶自由世界産油量のOPECシェア50%割れ。
 12月17日 ▶市場監視委, カルテル再建協議。
 18日 ▶石油相会議。値下げには全加盟国が反対表明。
 19~20日 ▶第66回総会(ウィーン)。生産わく調整でイランは320万BDを主張, サウジと激しく対立。83年の総生産上限1850万BD, 基準価格34^{ドル}維持を声明して閉会。事実上のカルテル再建失敗。
 12月27日 ▶メジャー各社, サウジに値下げ圧力。

第1図 アラビアンライトの価格動向



(注) スポット価格は各月初時点。
 (出所) 石油連盟。

第2表 原油生産量の推移

(単位: 万バレル)

	1981	1982											82年3月の生産割当
	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	
サウジアラビア	850	850	820	720	650	590	650	620	590	550	550	550	700
クウェート	73	70	70	60	55	60	65	70	80	70	70	70	65
U A E	148.9	138.3	137.5	140.0	115.0	117.7	120.7	120.7	120.7	120.7	120.7	120.7	100
カタール	34.2	40.3	40.3	31.0	23.2	32.2	40.8	27.5	34.1	28.7	38.1	31.0	30
オマーン	32.5	33.6	31.6	31.5	31.4	32.6	32.6	32.1	31.9	32.7	33.0	31.0	—
バハレーン	4.5	4.6	4.6	4.5	4.5	4.5	4.4	4.4	4.3	4.3	4.2	4.2	—
中立地帯	28.9	30.5	27.8	30.2	29.4	24.5	25.0	33.3	23.8	37.0	32.0	41.0	80
全世界	5,489.1	5,425.0	5,425.0	5,156.9	5,033.4	5,146.6	5,336.9	5,301.4	5,294.7	5,278.9	5,436.8		

(出所) Oil & Gas Journal.